

演劇会議

発 言	1
なかまの素顔 2	2

■地域演劇の二つの場から■

京浜協同劇団と京浜労演の座談会.....4

■劇 評■

土の会「初恋」他.....萩坂桃彦.....15

名古屋演集「島」.....黒沢参吉.....21

木々の会「イルクーツク物語」.....小林万吉.....23

四紀会「グスコーブドリの伝記」他.....仲武司.....25

「雪崩」の創造体験 (1).....藤沢薰.....28

活動めも.....31

■戯 曲■

『九〇〇一列車接近』.....島源三.....33

島君と私たちの劇團.....こばやしひろし.....63

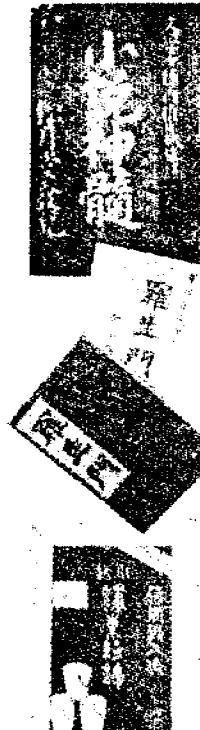


HOLP
HOME LIBRARY PROMOTION

で、ご家庭に
良書をどうぞ

名著複刻
全 集

近 代 文 学 館



福沢諭吉から太宰治まで名著名作 147冊・18万円

■ この全集の6つの特色

初版本・稀観本のみによる複刻全集です
日本百年の美と心を伝える出版文化史上の記念碑です
読む喜びと共に限りない見る楽しさに溢れています
厳密周到な出版・編集の考證がなされています
第一線文学者によるユニークな著作解説付きです
印刷・造本の権威が最高技術を駆使して製作しました

第1回配本(明治後期) 27点29冊 43年9月

第2回配本(明治前前期) 28点52冊 43年12月

第3回配本(大正期) 34点35冊 44年4月

第4回配本(昭和期) 31点31冊 44年10月

■ ご 購 入 方 法

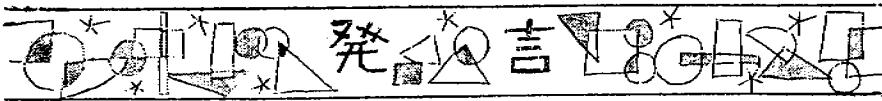
- (1) 全セット一括払い (2) 各セット分割(4回)払い
- (3) 全セット12回分割払い の3方法があります

お問い合わせ先

株式会社 図 書 月 販

東京都新宿区本村町39・ミナミビル

TEL 東京(265)7842(代)



今、テレビで参院予算委員会の模様を中継していた。全国区で百数十万票をとり最上位で当選し、子どもにまでその名を知られている男が、佐藤に「あなたは民主主義をどう考えているか」と質問。佐藤のありきたりの答えに「あなたは財界のため、財界による、財界の政治だと心配しているが、これで安心しました」と云つて質問を終えた。その男は佐藤を相手に、猛烈に皮肉り、看板についていた「意地悪る」ぶりをおおいに發揮しているつもりであつたが、場内は実になごやかな笑いにつつまれていた。

少くとも選舉運動の中で、この人気男の口から出た社会主義を叫ぶ言葉によつて、何十万票が投ぜられ、或は人気番組で彼が演じてたある種の反骨人間への痛快さや、其感が、又何十万かの票と結びついていたのであらうが、この百数十万の票は、現実の政治に対する国民の感情の現れである。

佐藤を相手に、「意地悪る」や「皮肉」が通用すると考へいるこの男の浅はかさもざることながら、ムードや感情の大切さと同時に、それにつきまとう不鮮明さに改めて慄然とさせられた。

運動についての、より確かな連帶をかためる必要があつた。単なる希望的観測だけでは、持続出来ないことは、過去のいくつかの例が示している。

合同機関誌の準備号として、先に第八号が発刊され、普及の結果について過日報告があった。

「劇団員の全部は読んでいない」「どうとう発行されたかと、一瞬とりあいが起つた」「読んでも面白くない」「読んで初めて『西リ演』の運動に参加する決意をもつた」前号について以上の相反する意見が聞かれた。

「読んでいない人」には読んでもらえるよう話合うしかないと、一瞬とりあいが起つた。「面白くない」という人には、まずそのわけを聞く以外にはない。なにより大事なことは、「演劇会議」を通じ、新たな支持者が生れたことだ。

七〇年をまつまでもなく「ベトナム」「軍事基地」「合理化」「物価値上」「軍国主義復活」が具体的に生活の中に反映しており、多くの新劇団やサークルで、観客との接点の中から、この状況に焦点を合わせ、鋭くとぎすました創造の追求がすすめられている。

今、「東・西日本リアリズム演劇会議」とその仲間「北海道演劇集団」等、七十数劇団、サークルが全国的な規模で結集している。

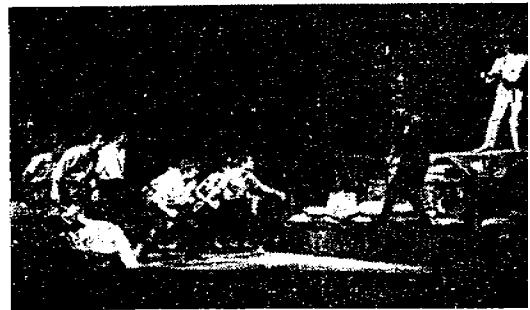
ここに東・西日本リアリズム演劇会議の合同機関誌「演劇会議」が誕生した。

機関誌の合同発行の話が出てから、二年の歳月が流れている。その間発行にともなう技術的な困難もあつたが、機関誌としての内容、編集にかかるリアリズム演劇会議がめざす

'68 東京芸術座地方公演上演日程

8・9月～10月 「国定忠治」

8月29日	塚山津根路	分山	野山	道山松島知	江子
30日	平和大彦姫	吳	玉福	尾松高徳高	"
31日	本吉島	崎	岡畑岡	"	松米
9月1日	熊人鹿	長	福戸福	"	
2日		11日		10月1日	
3		12日			
4		13日			
5		14日			
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					



10月～11月 「回転軸」



東京公演予告

多喜二・原作
林 知義・演出
小 村

蟹工船

11月29日(金)～12月8日(日)

毎夕 6:15分開演

但し 日曜日はマチネのみ 1:30分開演

入場料 A・1,000円 B・800円 C・500円

於・有楽町 読売ホール

10月 6日	京都	25日	盛岡
7日	姫路	26日	釜石
8日		27日	仙台
9日	長野	28日	秋田
10日	岡谷	29日	
11日	東京(中野)	30日	富山
12日		31日	新潟
13日		11月 1日	新潟
14日	千葉	2日	
15日	福島	3日	
16日	鶴岡	4日	東京(豊
17日	郡山	5日	小金
18日	山形	6日	品
19日		7日	(共
20日		8日	
21日		9日	
22日	弘前	10日	高崎
23日	八戸	11日	
24日		12日	

なかまの素顔 2



前崎圭以子さん

—福岡現代劇場—

こぎつけてしまいました。
とにかく、こと芝居に関しては、おそらく
表生つづらへで。

「カルラールのおかみさんの銃」のおかみさん。「制服」の巡査の女房。「陸橋」のおかみさん。「だけど私のせいじゃない」のかみさん。

通っています。

所をあずかる会計担当者として、その取り立て（お許しあれ）のきびしさは、お金に少々ルーズな男性劇団員の恐怖のまでもあります。

劇団創立以来（10年）の最古参の一人で、現在5組いる劇団員結婚のハシリを作ったの

卷之三

劇は、「岸も悪いがデモも悪い」という中立論の政治的意図を明らかにし、それが私達の劇団の所とな出港にならうとしたのですが、四十回

年に再演した舞台では、この視点を、自分の息子だけは戦争に取られまいとする母親の本能との矛盾のなかでどうえると、う県題に取

組み、一定の形象を創りあげています。

さて、ここで彼女との一問一答。
——まず、演劇に入るきっかけは。

した。」
「やは
られた作
「地獄破
——今
「私つ
の「おら
はまだま

——特に印象に残っている役は、「やはり、カルラールです。ちみつにつくられた作品だけにやりがいがありました。「地獄破り」の手妻師の役も大好きです。」
——今後は、どんな役を……。
「私って、少し欲ばかりですが、「女の一生」の布引けいのよな役、それとブレヒトの「おふくろ」も、是非やりたい役です。力はまだまだ遠くおよばないでしようが……。」
——女房・母親・女優と一人三役は大変なことだと思いますが、そのようこび、かなしみ、うきうきなどござります。

「どうよなことを……」

目的で一緒に創造するよろこびです。なかで創造すると云うこと、そのものが大きなところびなのにそれを夫と共にできるというところびと、それは最大の幸せです。

「悪い点の方が多いようです。自分で調べ勉強する前に、ちょっととついて聞きかじりわかったたよ気になること、これが最大です。今私の欠点につながる様な気がします。時には離婚しなければ私は一人前には成長しないんじやないかと深刻に考えたりもしきま

をひき、低い声で「新口村」の語りをはじめると、客席から「ホウー」という驚きの声が聞かれました。

大逆事件を素材にした、木下本太郎のこの劇は、随所に三昧のつまびき、淨瑠璃の語りなどが出て来る明治情緒一杯のお芝居ですが、このおけいの役に決つてから公演までの二ヶ月間で、「無理だからテープをカゲで入れては」という声をおしきって、どうやら「新口村」のさわりをひきこなすところまで

こぎつけてしまいました。
とにかく、こと芝居に関しては、おそらく
表生つづらへで。

「カルラールのおかみさんの銃」のおかみさん。「制服」の巡査の女房。「陸橋」のおかみさん。「だけど私のせいじゃない」のかみさん。「陽気な地獄やぶり」の女手妻師。そよ子。

して「和泉屋」のわけ、その他いくつかり創作劇の主人公公がありますが、役柄で云えばどちらかと云えば若い役よりも中年すぎ、それもドックリと腰をすえて中年女性を演じさせれば秀逸です。（本人はこれにひどく不満のようですが……）役としては私達に一番印象深いのは、カルラールのおかみさんでしょう。安保闘争の激流のさなかに公演したこの

できなかつたことでした。でも私のセリフや
相手のセリフをおぼえて相手になる時なん
か笑つてしまふ、ます。一

が笑ってしまひます」

最も重要なこれから演劇運動だと思いますが、それぞれ劇団の代表者や中心になっている人たちでの運動のようにまだ思えます。劇団員一人ひとりの身近かな西リ演であり、日本演劇運動であるように努力したいと思います。」

最後に—— サルさんのオケイちゃん寸評

「彼女は勘のいい役者だ、特に日常的、生
活的なリアリティをつかみとることにはすぐ
れた能力を持つていて。そこが彼女の弱点であ
る。作品の思想をつかみとり、それを形
象化していく面で形式的になりやすく、そ
れを生活実感で埋めてしまう弱点だ。

私自身の演出論、演技論を確立していくことは、常に役者である彼女との討議が重要だった。彼女のいい点は、なによりも頑張り屋であることだ。」

出席者

☆ 話合いの意義

一京浜協同劇団と京浜労演の座談会

黒沢 参吉
中沢 研郎
細田 寿郎
水野 哲夫
藤井 康雄
岡田 千寿
杉野 忠太郎
平木 美那子
河田 良二
関 開昭
斎藤 博章
角田 晴義
萩坂 桃彦
(劇団)
(労演)
(編集部)

劇団A この話合いをもつたのは「演劇會議」の9号で予定していた原稿が、急に穴になってしまい、それを埋めるのにたまたま以前から話になっていた、京浜で活動している協同劇団と労演がこの演劇状況について一緒に考えていくための話合いの第一回をやつたらどうか、それは全国の労演と私たちの仲間の活動に一定の役割を果たすだろう、という編集部の判断がある。話合いのものは今後、回を重ねて新しい問題をたて、中味を豊かにしていきたいが、今回は労演、地域劇団それぞれの立場がまず出ること、それがどうかみ合ってこの文化状況をつくっていくか、というあたりに焦点をすえたらどうか。

話合いのものは今後、回を重ねて新しい問題をたて、中味を豊かにしていきたいが、今は我々も責任の一端を感じている。と云つて、これをただちに例会にとりあげることで解決がつくものではない、むろんそのことも頭に入れてこれからやっていく必要はあるけれど。

一方最近、日本ゼオン演劇部や川崎北部の地域サークル「ぶるくわ」が、協同劇団を加えた三団体で川崎演劇協会を再建し、演劇祭をひらいたのは画期的だつたし、これを基礎に職場演劇をもつとも盛んにしていく、京浜労演もこれに関係して一応の成果をあげているが、まだ色々な役割が

もてなかつたのは、申訳けないことだし、特に『天佑丸』と『メコンデルタ』の公演が立派なごとだつたに拘らず、興業的には不成績だった、これには我々も大きい責任を感じている訳だ。

そのあと正式な会議ではないが、両者の意志疎通の必要が話合われ、それがのみつたのだが、Aさんも云つたようにこれを第一回に交流を発展させたいとおもう。もちろん京浜労演ができたことだけが原因ではないだろうが、現象的にはその時期から協同劇団の不成績という、本当にいえればあり得ないことがずっと続いている訳で、これは我々も責任の一端を感じている。と云つて、これをただちに例会にとりあげることで解決がつくものではない、むろんそのことも頭に入れてこれからやっていく必要はあるけれど。

時、東京の新劇団に目を向けて会員の要求は何かということを決めてきた。そこだけでは、会員の要求を充足しえないのを知りながら、一方協同劇団で出るものなどをキチンと捉えていない。そういう形でのサークル活動でしかなかつたという思いがする。第二年目でその辺を反省し、今後具体的にぶつかっていかなければいけないところへきている。

労演B 京浜労演ができるとき、劇団として、各職場にサークルをつくり、独自に文化の活動をすすめながら、中央の芝居を観る活動を続けてきた。その中で、しっかりと地域劇団と結びつくことでしか、本当の私たちの文化は生まれないんだと考えつけながら、それがキチンとやられていない現実があり、そこから労演のやつてているサークル活動と、劇団がすすめようとしている舞台をつくる上での組織の問題の、具体的なところでの結びつきがかみ合つてない。たとえば私たちが、芝居をもつてくる

あるだろう。現実には、建設座以来二〇年の歴史をもつ協同劇団が、いい作品を生んでいるのに観客が少ないという点を、労演としても何とかしなければならない。

劇団A いいしごとをしているのに観客が減少しているということ、それから、京浜労演が出来たためにそれに拍車がかけられたという風に僕らは考えていない。

事実問題としては、そういう影響を若干うけていると思うが、基本的には労演ができる前の劇団活動の原則上の問題や、普及の問題等について、労演ができるから練り直されなければいけなかつたということを考えるわけだ。つまり、川崎では新劇といえばうちの劇団しかなかつた、それは東京と遠くなれた都市ほどの隔絶ではなかつたにしろ、まあそういうことだった。そこへ東京の芝居が年間六回入ってくる、そういう状況の中でうちがどうやって發展していくかの問題が非常に大きくなる。

地域の劇団が新しい視点をはつきりもつて、自分の仕事を考えなおしてみなくてはいけないとと思う。Bさんの云われる興業の形について、僕らが戦前川崎で芝居をはじめた頃と本質的には少しも変わっていない。

劇団がレバをきめ、切符をうり、いわゆるセンターパン演をやるという方式を二〇年間ずっと続けている。こういう中に、マンネリズムの垢がたまつていなか、やはり変えていく必要があると思う。

☆ 効率一友の会—労演

労演C 労演ができる前、協同劇団には友の会があり、一方に「神奈川我々の文化演劇をおしすめる会」があつて、協同劇団に私たちの文化を創造させる立場で一緒に活動してきたのだが、それを基礎の大きい部分にして京浜労演は生まれた訳だ。

京浜労演は、全国労演の方針にのつとて、各職場にサークルをつくり、独自に文化の活動をすすめながら、中央の芝居を観る活動を続けてきた。その中で、しっかりと地域劇団と結びつくことでしか、本当の私たちの文化は生まれないんだと考えつけながら、それがキチンとやられていない現実があり、そこから労演のやつてているサークル活動と、劇団がすすめようとしている舞台をつくる上での組織の問題の、具体的なところでの結びつきがかみ合つてない。たとえば私たちが、芝居をもつてくる

労演D 話しあつたことはあるのか?

労演B 話しあつたことはあるのか?

労演C 話しあつたことはあるのか?

労演D ずい分やつててる。しかし、思惑みたいなものが先行して、本質的な討議にはな

劇団D そつ、完全な意思統一にまでならなかつた。

労演C 全体の問題はともかく、劇団の中心的なメンバーであるFさんが、労演の中心部に加わっているのは、その方向をめざしていだという風に考えられる。

劇団D それはね、歴史的にはつきりさせとかないといけないけど、むしろその後の状況の中から生まれてきた訳でね。劇団友の会の中心メンバーが、労演結成に動きだしたことについて、変な話だけれど、劇団では手のうちようがなかつた。友の会が独自の行動として労演をつくっていった形で、劇団に協力してやつていこうという意志統一ができたのは、労演結成以後のことだ。

労演E 劇団に人材をかりたり、名簿を公開してもらつたり、創立には相当な借りがある。

労演B 今までこういう話をしなかつたから、劇団は労演結成に力を入れてくれていると思つこんでいた。

労演E 色々の矛盾はあつた。友の会係だったD君の奥さんから、友の会事務局長を

『労演にとられたのは痛い』と云われた。

これも具体的なこつちの債務だな。

と運動の中味の問題としては、もつと堀り上げて考へる必要がありそうだな。

劇団D 今、協同劇団は総会中で、さつきAも云ふように、変な言葉だが演劇の自由化が行われて(笑い)一般的に見た目にいい芝居が東京から流入する。そこで僕らが同じことをやつていたら、観客はつきりそちらへ傾斜していく。どうしても、僕らとしての特異なマスクをもつ必要がある。それはレパートリーの中味から、観客にとどける公演の形体、それを裏づける普及の方法にいたるまで独特なものをつくる必要があるということで討議している訳だ。

レバの問題では、京浜の労働者の演劇―文化に対する真の要求をどうしたら吸いあげられるかということで、劇団全員での集団創作を考えている。全体で書いていくことで、職場や地域に結節することを考え、そこへ向けてのさまざまな作業をおこしていく。これは今までの劇団の舞台水準からみると、いろいろ凹凸がでてくるとおもうが、僕らのレパートリーとは何なのかを、この作り方の中で深くとらえなければならないところへきていると思う。

公演の形体では小上演を職場や地域にこ

劇団D 友の会を建てなおせなかつたのは、劇団の力の問題だ。労演結成後、劇団と友の会と労演の関係がすぐ明確にされ、友の会再建の方針がだせたら少くとも今みたいな状態にはならなかつたろう。

劇団F あの当時、友の会の活動が現実的には劇団の下請サークルの運動でしかなかつた。一部には自主的な動きもあつたが、總体としては自分たちがつくりあげていく活動にならない。だから、労演の中にそういうものを発見して、傾斜していったのは当然のことだつたとおもう。

劇団D 劇団がつくりながら長い間、友の会をおわぱり放しだした。なんとか強化の方針がでたのは、一方で労演の構想が明らかになつた時期で、そこでは協同劇団一つを支えるというのではどうにもならない状態にきていた。

労演E 劇団の観客のおさえ方が、劇団員個々が友の会員につながつて会費前納をしてもらい、あとの大・七割は券をバラまいて後で徵集するやり方だ。友の会員が、劇団員と個々にもつ関係には制約がある。労演の場合には、サークルを基礎に前納制をとつて、券をひろげて、いい時だけ来てきただ。

労演B 岐阜に行つてきいたが、労演の方もロツクに出かけていつて、そこで二・三ヶ月かけてキチツとつくった小形、中形の演劇を上演していく。従来、移動公演や文工隊活動をどう考へてきたかというと、やはり労働会館での年二回の本公演が劇団の顔で、小上演は要請にこたえる急場しのぎ、第二義的な意味でしかつかんでいなかつた。これからはそこを変えていく、当面重点をかけてやることを真剣に考へはじめている。

労演B それはそれとして、一方で現在の観客の水準をあげいくことが考えられないといけないのじやないか。今のままの観客では、協同劇団をみると、民芸、俳優座、文学座をよんで座文会館で二〇〇〇人でみるとこととが違つてしまふ。小上演だけで、そこを変えるのはむずかしいのではないか。

劇団F 労演がうちだしている、労演の創造活動と劇団がわの課題がどう結びつくかを考える必要があるね。実際に結びつかないことも多いだろうが、観客の水準とか要求というものが、劇団の課題と結びつかないのかどうか、その辺が基礎だ。

てくれというのでは、組織としてかなり弱い。

労演B 友の会自身の活動家がてきて、それでやつていけば一番いいだろうが、どうしても劇団が中心になつてしまうのだね。

☆ 演劇「自由化」の中で

劇団D 労演と地域劇団のこうした問題は、日記で、一八〇〇勤員ではじめて赤字をだしたというが、たしかに数年前、郡上一揆で六〇〇〇名にみせたのだから、労演の影響が大きいといえる。ほぐるまでは、新しく建設した稽古場に客席三八のホールをつくり、此處で二本のレバで一〇回から一五回ぐらいの小劇場公演をひらいてい

る。

労演C 岐阜に行つてきいたが、労演の方も劇団の意図にかみ合わせようとして、プロツク単位で小劇場を観せる活動をやつたり、劇団も岐阜近郊の小さな労演で公演したり、すごくいいことだと思ったけど。

劇団A 打開の方向としてはわかるが、創造のことは足りない。京浜の今日的現実をどうつかむかは、日本の一部、世界の一部といふ観点ぬきでは不可能だから。

労演B 『真土村一揆』では、平塚が舞台だということで相当な客がくる。しかし、地域だけのものをやつていればいいかというと違う。例えば『河』などは、協同劇団のもつともすぐれたものと思うし、ああいう全国的な要求にねざしたものもやらなければならぬだらう。

劇団A 地域という意味を單純におさえたのではなく、京浜の今日的現実をどうつかむかは、日本の一部、世界の一部といふ観点ぬきでは不可能だから。

労演C そのことと関連するのだが、全国労演の今度の総会で、会員拡大二〇万の目標にたいして一三万三千しか達成できなかつた。それでもFさんの云つた三劇団のレバが大きくひびくので、東京では『女』の一生々で二万集めて有名でない作品だと一万二千、小さな労演がいくつも潰れるほど変動が生じる。その中で敵のしめつけ、新劇団の今あり方など深くからみ合つての一三万三千であり、三年前からみるとやはり伸びているし、そこから二年後の安保にむけて二〇万労演を―という確認がされた、これが第一点。

それと、イキイキしたサークル活動をお

こす、これが創造活動と結びつくという捉え方をしている。劇団との結びつきも、一般的なことでなく創造をめよる意味での強力な結合が必要だし、今日も平和委員会の海上調査に劇団と労演が参加しているのだけども、七〇年にむけて京浜は日本の心臓部ということを重視しなければならない。その観点で労演は職場へサークルをつくる。その中で、職場の状況が話しあわれ、創造と文化を発展させる部分が結びつくことをめざしていく。

一年半の中ですっとやつてきた合評会がこの頃とてもすばらしい内容になった。新しい人も古い人も混じっていて、古い人は技術のことで発言する傾向がつよいが、新しい人は職場の状況とのかかわりでその作品がどうつかめたか、を問題にする。自分たちとピッタリしたか否かが、芝居のよしあしの基準になるのね。今的新劇団と協同劇団をみていくと、自分たちの創造方向と劇団のそれがピッタリ結びついで理解できる。うちの労演では一万人なんて大きい目標をめざしているけど、それはサークル、ブロックの中で劇団との創造的な結合をつかつていかないと達成できない。

☆ 創造とサークル要求

劇団A 僕らが運動の柱としてレバと上演形体を、観客との結合の点で考えるのもそこなのだね。日本の地域劇団の活動をみていくと、どこでもセンター公演だけに依存するやり方から、何らかの脱皮が試みられてる。大阪の息吹は歌舞劇へ天満のトラやんを生んで、非職業だが年間万単位の観客にみてももらっているし、南大阪演劇研究会では勤労婦人の職業病ケンシヨウ炎を素材にした芝居をつくりて職場に入ったところが、患者さんから切実な相談をもちかけられて、芝居を闘いの武器とよんだ真実の意味をその実践から学んだという。要するに観客＝労働者と一緒にたたかう中で、劇団の進路をひらいている。

労演B 劇団の創作戯曲について意見だしてくれば、稽古場へも来てくれとやつてあるが、なかなか行かないようだ。これを労演でとりあげて、脚本研究会や稽古場訪問で、サークルの意見をあげてもらうつまり、映画『ドレイエフ』を作成するようなやり方がやれるのではないか。二〇〇〇の組織を劇団でも利用しない手はないし、これは労演に話してもこっちのねがいは一方交通でね。だから労演が創造に参加するには地域劇団との結合が大きい意義をもつし、それも観客が増えれば自然にそういう関係が生まれるというのは安直とおもう。現在の劇団とのつながりは、心情的なものやテーマへの共感としてはあるが、実質的な提携になつていいのは、やはりサークル活動のなかでの協同劇団の位置づけの弱さだ。

にも大きい収穫になるとおもう。中央の本より、黒沢の戯曲なら親しみもあり、ちがつてくるし、そこから例会への道もひらくだろ。

劇団D 劇団と労演の交流ということだが、いまのCさんの云つた職場の要求にねじってサークルをつかんでいかないときだ。僕ら自身が体をひっさげてサークルへのりこんでいって二〇〇〇、三〇〇〇ということにしない。

労演G 正直云つて協同劇団をひろげるのは苦しいね、『天佑丸』でも三人ぐらしかやれていない。東京の芝居とのちがいはわかっているんだが、東京の芝居では合評会で職場の問題を中心に、それを劇団の創造へどう反映するかという点で、俳優さんと話してもこっちのねがいは一方交通でね。だから労演が創造に参加するには地域劇団との結合が大きい意義をもつし、それも観客が増えれば自然にそういう関係が生まれるというのは安直とおもう。現在の劇団とのつながりは、心情的なものやテーマへの共感としてはあるが、実質的な提携になつていいのは、やはりサークル活動のなかでの協同劇団の位置づけの弱さだ。

劇団A さつきBさんが大変具体的に、『ド

レイ工場』を例にされたが、僕らのような

種類の劇団が本当に労演と協力すれば、経費も安く期間も短く自主製作がやれる。

これでサークルの要求にこたえられれば、新しい力強い方向がひらけるとおもう。

労演B それは、力強いものになるね。

劇団D いま出てきている課題が、実践的に統一されて発展するだろうね。

労演G さまざまなかいの要求を、これだということでまとめるには、一緒につくることを考えていく必要がある。名古屋労演が自主企画について最低一年かけると云つて

いたが、単に意義だけじゃなしに、責任をもつてつくりだしていく組織の強化といふこともそこから生んでいく。

劇団F 効率活動が忙しいから、劇団員は個々の職場でしか観客との接触をもつていいのだが、これは労演活動の原則的な課題にあわせて、労演のブロック・サークルへもちこみ、吸いあげてくる。その日常交流の中で一緒に地域文化をつくる観点が必要だね。

劇団D どうも切符売りになる、これじやダメだな。サークルによさわしいあり方を、

協力してつくつしていくことにならないと、押しつけでしかないんだ。

労演B 『おふくろの歌』で組織的な協力体制をつくるうということで、二十三人の実行委員会をえらんだ。ところが選び放しで組織としての保証がないから、形式で終ってしまった。だから、サークルとの連携も勿論だが、常任や運営委同志の機関としての交流もはからないとダメだろう。とくに我々の『ドレイエフ』を実現するには、そこの大事だ。

劇団A そういう協力がみのると、当面大きい収穫を得るのは劇団側だから、逆にひつこみ思案になるんだが、やはり創造上の思想、地域文化をつくりだす機能の問題として考えていく必要があるよね。

劇団D そこがしっかりしないと、文化の皆としての劇団、労演、うたごえなどが、例えば税金問題ひとつでとりくむといつても本もの結合にならない。

☆ いかりを行動へ

労演E 創作の具体的なことだが、労働者の場合、合評会で職場のことを発言しても、本人は八時間労働の中で現象の一部しかつ

かんでいない。それを五、六人きいても現実を十分反映しているとは云えないんだね。

職場全体でのその五、六人の位置をよくみないと不十分だ。黒沢の『鶴操』初稿の欠限も一つの原因是そこにある。労演も二五〇サークルあつて、いろいろもつてくれるが、個人的になり行動的につかめていい。材料としては価値あるが、そのききこみだけでは創作の土台として不足がある。東京の劇団はきいてくれてもとりあげてはくれない。

劇団A しかし、『ゼロ』の記録で大橋さんにきいてもらっている話をつた。内容もよかつたし、ああいう機会は今後もつくつてほしいとおもつてゐる。

労演C 効率によって姿勢が大変ちがう。東演などとも真剣で、みんなの発言メモしてかえる。有名な劇団ほどき方がいい加減なんかじで、鋭い質問ができるとそれはこ

ういう意図だったみたいだ。弁解が先にたつて、みんなの意地悪云つてんんじゃないのに。でも、そういうのいけないと製作部で批判したせいか、この頃は話合いのつみ重

「演劇会議」10号は

東西リ演総会特集

西リ演総会は八月三十一日福岡で、東リ演

総会は八月二十五日掛川でそれぞれ開催、両会議の結果と演劇戦線の統一によって

七〇年へたちむかう運動方針創造普及の前進のための実践計画を打ちだしました。

「演劇会議」10号は、両総会の内容紹介

七〇年へたちむかう運動方針創造普及の前進のための実践計画を打ちだしました。

東リ演では創作戯曲への全体の要望のたまりにこたえ、各劇団内外の若い書き手のたまりにこたえ、各劇団内外の若い書き手のたまりにこたえ、各劇団内外の若い書き手のた

に編集の重点をおくほか、八月二十四日三四集団一六六名の結集でおこなわれた、第一回演劇ゼミナールの報告も掲載します。

その他、岐阜はぐるま訪問記、創造体験、劇評、五〇枚ほどの戯曲等をのせます。発行は一〇月の予定。

東リ演で創作学校

東リ演では創作戯曲への全体の要望のた

に編集の重点をおくほか、八月二十四日三四集団一六六名の結集でおこなわれた、第一回演劇ゼミナールの報告も掲載します。

三四集団一六六名の結集でおこなわれた、第一回演劇ゼミナールの報告も掲載します。

ぶつけるかぶつけるのない怒りを職場のなかへよびおこしているし、労演の活動家も疲れて芝居みのもしんどい中で、炎天下の下でまつ黒になってしましかし組織活動をやっている。いかりを行動にかえて、それを結合して高くなっていく。どこの職場でも、そういう怒りの体質でキヤッとしたものをつけあげていて。労演E 労演くるのは活動家だから怒りになるが、職場の人のうけ方はちがう。ヤツは運が悪い……そういう多くの声を活動家がここへ来て云わない。威勢のいい声は耳に入るが、弱い声かけの声をきかないとダメなのだ。

労演B そういう人にも怒りはある、外へ形にならないとしてもね。

劇団D 劇団総会で劇団員個々の総括だしてもらつたら、ゴーゴー踊りながら組合活動やつてる——というのが書きたいやりたい、こういう意見がでている。労働者や活動家の質もかわってきてるんじやないか。

労演C 話しあうことが、その怒りをはつきりさせる。労演の大多数の会員は、組合への関心もうすいとおもう。それが、ペペトナム討論のあと、この労演の家で、ペト

ナム討論もう一回やりなおしたの。同じ職場の二人の青年が、お互いのうけ方のちがいを話合つたり、別の職場の若い娘さんは、いま働くのがすごく楽しいし、上役にも可愛がられていて自分のこと籍入娘だというの、でも自分もそういうものの見方をしなければ、というひらき方をしている。これがサークル活動だとおもつた。

劇団F どこかでその部分がマヒしてしまっている。ゆたかな感情に触れない、怒りがスパッと入つてこない。劇団や労演の上の方でしごとしているところ、皆のそういうものが直かにこなくなるんだな。

労演G 労演と劇団の提携で、ドライブ工場といふことになると、立派すぎててしまう、そういうところに問題がある訳だ。川崎で

き場がない、では地域劇団という肩がわりはできない弱さがあるだろう。土の会にむかって、△初恋△についても注文つけていく。土の会では反発していたが、とにかくこういう態度は今までの労演とのちがいを示しているだろう。

又、東京のある労演サークルが劇団をつくり、今度東労演に出演する。新しいサークルが一つ生まれた以上に、おもしろい意味をもつていて、待つていらっしゃないので行動にうつす。これは積極的なふみきりをして注目したい。

労演H 労演と劇団の提携で△ドライブ工場△といふことになると、立派すぎててしまう、そういうところに問題がある訳だ。川崎で

も僕女の一生△へ人形の家△で労演はのびている。その時期に△天佑丸△が六〇〇、

この状態はどこか狂つているということだ

ろう。そこをお互いにさぐりあてる必要がある。△初恋△をするな、という声、△天佑丸△をやれ、という声、それが全員からでれば成功する。観客数の増大がしがと

でないと云いつつ、それやらないと労演はなりたたない。そこへ協同劇団を入れると

いうことが、全員の要求としてつかまれ、

めの創作学校をひらきます。
詳細は事務局から連絡しますが、時期は来年二月中の土・日曜をあて、開催地は関東と東海の二ヶ所を予定。あらかじめ提出された創作戯曲（なるべく一幕劇）を中心に、講評と討論をおこないながら、作品の具体的な改善方法を探求することにします。
提出作品のしめきりは一二月末日、各劇団の早速のとりくみを期待します。

提出作品のしめきりは一二月末日、各劇団と討論をおこないながら、作品の具体的な改

善方法を探求することにします。

やられたか、その辺が知りたい。

劇団I 労演観客と劇団観客の要求にはちがいがある。労演会員のそれを純粹に演劇要求とみてはちがいはないが。マスコミの求

められることからつくられる認識がある。『人形の家』『女の一生』の成功には、その要素がはたらいている。こうして増大した観客をサークル活動でどうたためるかだ。

劇団の場合、九年のおいたちの中でやはり観客の認識はちがっている。ここだけ連帯を考えてもどうにもならない。いま観客が減少しているところで云いにくいいまいにしてサークルへ入つても意味がない。劇団は独自の普及方針をもつし、その

活動でどうたためるかだ。

劇団の場合、九年のおいたちの中でやはり観客の認識はちがっている。ここだけ連帯を考えてもどうにもならない。いま観客が減少しているところで云いにくいいまいにしてサークルへ入つても意味がない。劇団が地域で創造集団として独自の自立場をもち、それが一般観客の中へ入りまじって作用するのが重要とおもう。サークルへ行くのはいいが、その主体的な立場をなくして、よりかかるのはよくない。当然援助すべきなのにしてくれないと云うべきなにしてくれないと云うべきなにいった考え方から労演に敵対する、山口のはぐるま座などその典型だ。

労演B 主体性を失くすというのは、どういうことかね。

劇団A もちろん、労演観客にしなだれかかる姿勢で連帯がつくられる筈はないが。

劇団D 劇団と労演とのかかわりをどうふかめるかということだが、僕らはそれだけをしてことにしてる訳じゃない。これは、労演もそうだろう。

労演E 主体性はスキにできない。それをあいまいにしてサークルへ入つても意味がない。劇団は独自の普及方針をもつし、その

上で労演との関係をつくるべきだ。

労演J 『天佑丸』六〇〇について、どこか狂っているみたいにHさん云つたでしょ、その辺もと話したら。

労演J 労演と専門劇団の関係は、金払つて満足する、それで成りたつてある。協同劇団の芝居では四〇〇円払つて、そういう

満足があるのかどうか。上手か下手かときかれる、僕なんか下手だつて云うんだ、下手だけど観なさい、観た方がいい。

(笑い)協同劇団は協同劇団以外のどの専門劇団とも違う、それは得なことで、そのオリジナリティを魅力として生かさなければ意味ない。労芸の『今日も……』なども専門劇団なんか観られないといった、少々オーバーな受け入れ方をする。こうしたことからこれこれの芝居やれるというところから、逆に会員から今の状況でこういうものが観たい、やつてくれということにしないとね。

労演J それはずつと指向されている。京浜建設座から京浜協同劇団への長い歴史の中で多くの人が観ているのだから。

労演J 会員の要求とということで、劇団の方の密着とつみ重ねの実践にあるだろう。協同劇団の芝居の質は、専門劇団に充分太刀うちできる。

労演E 有名な劇団、俳優がサークルの一定の魅力になっている。協同劇団がいけると云うのは、それを変えることだ。

劇団D 名古屋労演が『郡上一揆』で、企画に大きい確信をつくった訳だが、あの経験に学ぶ必要がある。

劇団A 名古屋は今年も八・六を中心、劇団演集の『島』で四〇〇〇集めている。京都労演でも九月、地元の京芸・人間座合同の『金魚修羅記』で五〇〇〇の動員計画を立てている。両方とも地域劇団の姿勢、実績が観客の中で評価されている点は見のがせないな。

労演B 演劇活動を理解して入ってくる人は少ない、それを知つてもらうための労演だし、労働組合や民商でもそういう認識をもたないの方が多い、水準が低い、といふ

だが、京浜労演では協同劇団を例会に入れられるのか。やるべきか否かでなく、成功前からおこしてやれば成功する。それでも一般的の三分の二しか集められまい。

労演B 成否はやはり準備のつみ重ねにかかるが、それがやれば成功するだろう。

労演G 『鶴操』を特別例会にあげた。

労演E 台本を早くあげ、交流や準備を一年もそうだろう。

労演J まいにしてサークルへ入つても意味がない。劇団は独自の普及方針をもつし、その

上で労演との関係をつくるべきだ。

労演B 成功ではない。

労演D その『女の一生』でも、座談会を沢山企画しスライドを使い、大へんな努力をしている。そのプロセスで演劇要求とちがう質のものもみでてくる、そこをキツチ

りくみつていかない労演運動の発展にならないという認識があるとおもう。

劇団D みたい芝居、みせたい芝居

労演J 会員の要求を劇化していくこと

とで、『ミステリヤブッフ』『ヒロシマ』について……が生まれたが、興業的には失

らむが、これを観せたいというもの、覚悟の上で大胆にやる必要がある。

労演B どうしても観てもらいたい芝居といふものがあるのだから。

労演J 会員から協同劇団という声が出ないのは、みてないせいだ。だましても一回観せることだ。(笑い)無料招待してもいいんじゃないかな。(笑い)

劇団A 劇団観客について考えると、『天佑丸』六五〇『メコン』三五〇で、一〇〇〇名ということだが、最近まで観てくれた人のトータルは約二〇〇〇、これは僕らの今

の力のかけようで来てくれる人だ。労演の二〇〇〇人はこれと一致しない、あるダブル方しているがね。劇団では二〇〇〇人への回復、これが第一目標。その上に労演の観客があり、更に小上演活動の中で全くと云つて新しい新しい観客がどうつかめるか。

この三つの加算が近い将来の観客像だとおもう。従つてレバの問題も、鋭いこととして何をやるかがでてくる。

この総会で若い劇団員から、若いエネルギーにみちた明るい芝居、喜んで仲間を誘う、誘わなくても来てしまうみたいな、そういう芝居をつくりたいという要求がで

ている。それと、京浜の現実をどうふかくえぐるか。この二つを僕らは分歧させていた。難いけれど、現実をリアリストイックに描いたものが、面白い芝居になつていく、創造の課題だとおもうのだ。

劇団D 集団創作のことも多くて、それはから調子が良いと云われたけれど、やはり双方の発想がピタリ結びついた、ということがだね。（笑い）

☆ われわれの夢を、舞台に
労演E 日本の『イルクーツク物語』がほしいね。

劇団A あれは労働のよろこびと結びついて生まれている。今日も海上調査に参加して感じたが、アメリカのベトナム侵略に加担させられている中じや、『イルクーツク』は生まれそうにならないね。

労演G よその国の芝居、夢ものがたりって感じだな。

劇団A あの前に、つくりたいもの、みたいなものがある。

劇団D 労働者の夢が、われわれの次元ではしいね。

劇団A それはそうだ。日本の現実の中で、

若い人たちはシカメ面ばかりしてるわけじゃない、闊い行動があり夢もある。秋の年も秋ぐらいを考えてもらわないと困る。公演に期待してほしい。

労演G ことしの秋じゃなく、長い展望で来年も秋ぐらいを考えてもらわないと困る。公演に期待してほしい。

労演C 会場があいていない。全国どこでも共通した困難だ。劇団でもスケジュールが決めきれず、題名くらいしか出せない状態だ。長い展望というのは、それに合わせていうことじやないけれど。

労演G 普及活動やついていると、観てもらつた芝居が会員や活動家の中で、どういう力になつているか確かめたくなる。創造する立場で合評会など話合いの場へ、劇団も加わつてほしい。労演にくらべると協同劇団の台評会はおもしろくない。

劇団A どうも劇団主催のより、職場でひらいてくれる合評会の方がいいね。技術的なことより、自分が何をうけとつたかが中心で、僕らにも勉強になる。

労演C 位置づけがしつかりしていない。

労演G 日生の『ベニスの商人』観てがつかりしてた人に『天佑丸』みせたら、こういだから。（笑い）

労演C 位置づけがしつかりしていない。

労演G 日生の『ベニスの商人』観てがつかりしてた人に『天佑丸』みせたら、こういだから。（笑い）

労演C 位置づけがしつかりしていない。

労演G 日生の『ベニスの商人』観てがつかりしてた人に『天佑丸』みせたら、こういだから。（笑い）

劇評

土 の 会「初民芸「ゼロの記録」
青年劇場「シエイクスピア劇」
京浜協同劇団「メコンデルタ」
〃 「天佑丸」
萩坂桃彦

ぼくらが劇評というようなことをする場合に、ひっかかることが一つある。それは、批評の基準のおき方とかかわって、人のことはとやかく云うが、お手前はどうだ、というようなことである。これは、ぼく自身についても、土の会の山村金平氏から、いつだったかいわれたことがある。どうも御批判とそちらのお仕事の出来とがぴったり合いませんな。じつのところ、これにはかえす言葉がない訳だ。ところが、実はこの、必ずしも云いつ放しでない、それはそうだにしろやはり云つてみようとするあたりに、ぼくらが共通の課題を見出しある場がある訳なのだ。びたっとおさえて、云い放つことは、それほどむつかしいことではない。批評する側の鑑識眼のごと

きものをひけらかすだけだとしたら、それはいつそう、やさしい。

じつは、その云いつ放しの、安易な批評ととられそうな言葉を、ぼくは、ある席で、それも、最近観た土の会の「初恋」に対して云つたのだった。「十人以上の、余程の経験のつんだ俳優のいい限界、ああいう本はやるべきでない。」まさにこれは放言にちかいが、しかし、やつづけて快哉をとなえている

として定着しているものを、それを、土の会がもう一度追いかけてみせることの意味。民芸の舞台を全くの不満として、挑戦してみせるというのだったら話は別だが、ぼくの見較べ限りでは、その論理の立つ余地はない。はつきり云つて、それは一そく小規模で貧しいだけである。だけ、と云つてしまえば、あらぬかも知ぬ。成程、こうした、額面も内容も公定価格のようによく公開されている芝居に、土の会が、独自の力で、どうよな気持でぶつかってゆくファイトや、また土の会なりの規模で、「イルクーツク物語」におけるソビエト社会での、恋愛や労働、家庭の問題、「初恋」での、世代の相剋のようなものと、『初恋』の立つ余地はない。

ソビエト社会での、恋愛や労働、家庭の問題、「初恋」での、世代の相剋のようなものとでは、うらはらで、土の会に寄せるいのと云つて、レパートリーそのものについてである。「初恋」と云い、それに先だって上演した「イルクーツク物語」と云い、一応二応もの、劇団民芸の商業的レパートリーとが重要なことがわるとおもうな。中央線沿線に住んでテレビの本で食つてたんじや、小市民的なものしか出でこない。もっと民衆的生活に入つてこない、と、今の現実からとり残される。

劇団D われわれ、ゲリラみたいな連中にガタガタ云われるより、快適だらうからね。

劇団A ゲリラといえば、この間茨木恵さん

が北海道演劇集団の講演会で、地域の劇団活動を民衆と密着して地域の文化状況をつ

くつしていく解放戦線にあてはめて話した、と云つてた。そのとき、本当にそうなるのは大へんだが、われわれの目標はそれだらうね。

労演C 最初の話合いで、明るい展望がみえたつてところまでいかないけれど、次回で又ふかめることにして、この位で。

う劇団があつたのかとすぐ新鮮におどろいていた。そういう人、一人でもつくることが重要だ。

労演E 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人、劇団が職場に根をもつて二、三〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演F 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

それが不可能なことじやないね。

劇団A それは不可能なことじやないね。

労演E ただ、東京の劇作家は民衆と一緒にがわかるとおもうな。

労演F 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演G 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演H 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演I 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演J 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演K 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演L 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演M 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演N 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演O 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演P 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演Q 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演R 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演S 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演T 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演U 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演V 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演W 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演X 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演Y 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

労演Z 労演が中央のいい演目やつて五〇〇〇人を集めるようになつたら、文化状況は

この、土の会のレパートリーとその舞台に、
ぼくはくみしかねたのである。

それは何かというと、ああいう芝居をやり
おえたの、スタッフやキャストの敗北感にし
る勝利感にしろ、その後味のところが、瞬に
落ちるときにかなりあいまいなものになりは
せぬかと思うのだ。一方では負けて当たり前だ
し、一方ではよくやつたということがあ
る。そして、他方では、アンケートの収録に
よる「好評」ということもあるだろう。その
好評も、戯曲の分り易さや良さによるもの
が、実は庇護されているよう
な工合になっていく状態。云々のきく俳優の
創造的拙さ、その拙さの端の方では、その俳
優にとっては、十年も十五年も先のことと思
われる役の表現が、いま、そこで、照れくさ
そうにやられているというようなことが、ほ
んとうに、その俳優の修業になつてゐるのだ
らうかとぼくは惧れるのだ。

十人以上うんぬんのぼくの言葉の真意は、
じつはそれだったのだが、もしそれ以外のこ
ととして受けられたとしたら、やはりここで
謝つておく必要があるだろう。

るというだけでちつとも良くなかったが、そ
こでは、俳優がシャンシャリ出で、全く観客と
馴れ合い、傷をなめ合つてゐるような汚れた
関係を作つてゐるのだった。観客の卑俗な歓
迎の前に、役への創造のきびしさといったも
のは全く忘れられてゐるのである。こうなる
と、それが、働きながらとか、アマチュアと
かの、新劇の劇団だけに、観客への媚びを主
目的とした通俗的な軽演劇以下ということに
なる。

これは観客の捉え方での錯誤だろう。観客
との関係でうちたてなければならぬ、劇本來
の持つきびしさの回避であり、放棄だろう。
そこで一そくこまるのは、そういう見つとも
ない仕事をしている当事者が、そのことに気
がついていないという二重の退廃である。

退廃はこうして不識のうちに、細菌のよう
にしのびこんでくるのだ。経験で、何かしら
判つてしまつてゐるような職人の仕事や、
押せ押せの考えるいとまもない強行スケジュ
ールや、芝居以外の何かをおしつけて意味づ
ける観客への迎合と履服。それはやはり退廃
につながる貧しい創造を生むことになるのだ
ろうとおもう。

話が妙な所へ行きそつだが、多分に自戒の

土の会から、よく、東京の演劇状況の捉え
にくさを聞くのである。創造のことでも、
観客のことでも、それはあるらしかった。大

小の劇団がいりまじり、ひしめき合つて作つ
ているカオス。そこで何かを主張して見せる
ことのむかしさやそれをするときの手だ
て。「金魚風土記」から「イルクーツク」へ
「初恋」から「書けない黒板」への土の会の
レパートリーの振幅は、その因つて立つとこ
ろを物語つてゐるのだろうか。また、土の会
は「女たちその光の中を」というような、劇
作そのものを含めての実験的公演もして
いる。あわてて結論を出すにもあたるま
いが、同じ東京の空の下でも、ぼくらの「勞
芸」のような素朴そのもののような劇団も併
存するとき、気にはなるのだ。

労芸の「蒼氓の宿」では、ぼくは、演出者
としてやはり敗北したと思っている。三月に
もたれた東リ演の創作部会で、この作品につ
いての貴重ななかたちの意見があつたのだ
が、それをぼくらは、稽古の中へくみ入れて
ゆくようなら作をさぼつてしまつたのだっ
た。これは全くぼくの責任だ。主題のあいま
いさや人物の位置づけの不安定さが、この作

にそくした創作劇の場合、とかく観客の好意
におもね、凭れてゆく傾向はないか。勿論、
観客にむかつての積極的な姿勢まで否定して
はまちがいたが、そこに、創造の憂困を生む
ことは許されぬことになると思うのだ。
これは少し行きすぎた例だが、ある所で、そ
れは、退廃というものだった。

ほんとうに、ほかの人にはそういうことは
ないのだろうかと、ぼくは思うのだ。
創作劇、それも、地域性やその時代の思潮
を、これまでの仕事の馴れで処理してゆく余
地はない。だからこそ、何となる。「何とかなる」。こ
れは、退廃というものだった。

ぼくは、こんな状態の芝居を見たのだった。
それは、こじんまりとした、その劇団のファ
ンらしい観客を前にしての舞台だったが、そ
のレパートリーはその劇団の趣向に合つてい
た。この不確さは、大づかみでは、当初、一
寸判らぬたちのものだった。読んだ限りで
は、作者の思わぐのようなもの、人物たち
も、いかにも、らしいものとしては描かれて
いたのだが、セリフにまで分け入つてみる
と、そこにはむしろ矛盾撞着といえるほどの
複雑がひそんでいたのだ。気がついたときに
は、もう手おくれのかたちで、ぼくはそれ

意味で云つてゐるだけでは他意はない。そこで、
この話をもう少し続けると、逆に、この頃
の、演劇の多様化というようなことが云われ
る、形式や内容のあれこれの試みの中にも、
どうやら観客を置きざりにして、卑俗性を排
除しているつもりのものが、かえつて、新し
い卑俗性を生む結果になつてゐるということ
も云えそうだ。

民芸の「ゼロの記録」を、そのことにかか
わりがありそうにして、ここでとりあげるの
は誤解を招くが、話の途中で浮かんでくる位
の関係は、じつはありそうだとぼくには
思えるのだ。

「ゼロの記録」は、ある席で、それに主演
した佐野浅夫が云つたように、絶えて得られ
なかつた日本新劇史上での財産として残り得
る創作劇、残して然るべき創作劇、という風
に戯曲にそくしては、多少の身島氣はあるに
してもそう評価してさしつかえないだろう。
他方で観客によけいなサービスをしたのであ
る。諷刺とも批判ともつかぬ、その点での輕
さをともなつた観光バスの案内娘の声を流し
たり、公演日の中を追うて刻々新しい時事ニ
ュースを流してゆくというやり方で、観客
セリティにぴったり寄りそつてみせながら、
包んでみせたのが早川演出である。いわば、
そこで早川演出は二元的操作を行なつたのだ
った。一方では、この戯曲の持つアクチュア
リティと作者の厚味のあるヒューマンなシン
セイティにぴたり寄りそつてみせながら、
そこでは、この戯曲に対する理解を手だけしたの
である。確かに、この戯曲の内容の重さや、
ときには、むごさ、暗さということはある。
とくに、戯曲の各シーンの枕にある古風な詩
などは、そのまま舞台におきかえたのでは、
冗漫もあり、かえつて、無くもがな、にな

品の印象をすっかり抜けたものにしてしまつ
た。この不確さは、大づかみでは、当初、一
寸判らぬたちのものだった。読んだ限りで
は、作者の思わぐのようなもの、人物たち
も、いかにも、らしいものとしては描かれて
いたのだが、セリフにまで分け入つてみる
と、そこにはむしろ矛盾撞着といえるほどの
複雑がひそんでいたのだ。気がついたときに
は、もう手おくれのかたちで、ぼくはそれ

つたかもしだれぬ。そのカットはうなづけると

しても、そういう処理ではなくて、作者が油汗を流しているようなところを演出者が手ぎわよく拭いてみせたようなところ、そこに、

早川演出のドグマ的な踏み外しがあったと、ぼくには、それほど責める意味ではなくて

も、感じたのだ。それは、同じ演出者によつた、「郡上の立百姓」や「狼」で見せた、

美しい「途なものに、喜びを感じた観客の一

人で、ぼくがあつただけに、よけいその感が

ふかいのだ。

どうだらう。ある種の商業イズムにむかつての早川演出のおよび腰のようなものを、ここで、据のみだれ位の程度でもいいが、あるべき姿のくずれとして見てることはできな

いだらうか。

ここで、青年劇場の、二本のシェイクスピア劇についてみてるのは話ついでとし

ては自然なことである。「真夏の夜の夢」と「十二夜」だが、戯曲そのものに立入つての舞台批評をするようゆうは、いまはないが、逆

に、問題を、シェイクスピア劇における青年

劇場という風に立ててみると、ある種の概

括はできそうだ。

「メコンデルタ」は、せひ見たいもの一つだった。京浜協同劇団が、いち早く、その戯曲の評価を行い、そしてそれを直ちに舞台にのせて見せるという早手まわしは、いかにもこの劇団らしいが、ぼくが見たかったのは、もちろん、そういう早わざではなくて、祖国防衛戦争下のベトナム民衆の生活と苦悩、またそこからしか生れて来ぬ明るさ、それがどうやら、ぼくらとしては手がけにくく、民衆のリアルな生活の中で掘りあてようとしたらしい戯曲そのもの、そして、それをどう受けとめるかの演出、演技を見たいのだつた。

浅見祐治のこの戯曲は、三月の創作部会でとりあげられたものだ。(『演劇会議』第八号、私たちの創作劇Ⅱ黒沢參吉)。そこで云われた愛想のない荒けすりの魅力というのは適切である。そこには、がつしりとした骨格があり、必要なだけの人物とそれにふさわしい会話がかんげつに書かれている。しかし、ぼくらは、この戯曲の内容に、とくに人物の周辺や彼らのいとなむ生活にどれだけのリアリティがあるかということは、作者とともにおしゃかりがたい。

「行つたこともない見たこともないベトナ

青年劇場が全国の高校生にまみえていると

いう事情から、高校生を観客においた上で

照り返しのようなものが、舞台の俳優たちに、一種の染色をほどこしている、これは指

摘できそつである。そのリズミカルな動き、

ハリのあるセリフ、全体としてピチビチはね

まるテンポ。しかも、明るく、美しく、客席から溜息やクスクス笑いの出るのさえもの

がさすとらえる機微。これはもう観客と一体となるという点では大へんな熟練である。

そういう関係で、退廃の入りこむ隙を与えているのは、戯曲に嵌つた、演出者や俳優の正統な姿勢であり、それからくるくりかえしの創造上の研究、もう一つは観客への謙虚さというようなことによるのだろうとおも

う。「真夏の夜の夢」は、時をおいて二回みたが、前回になかつた新しい魅力を添えて二回目にはまみえているという印象はあつた。

問題は、シェイクスピア劇のもの、はつらつたる若きや健康さというのではなくて、青年劇場が、若い、そしてやはりそれにふさわしい一種の甘いものとして演じがちなシェイ

クスピア劇の壁をどう破つてゆくかである。

シェイクスピアは、まさか、こんにちの高校生のためにのみその戯曲を残していったとは

云えないだろう。シェイクスピアの愛した正義や友情、そして自由な庶民、限りない恋愛

への讃歎。それらは、高校生だけではない、まるごとの人間をかかえこむ巨きさを必要とするものなのだ。青年劇場のシェイクスピア劇の大きさとして捉えてゆく。そのことが青年劇場の成長とかんれんして注文されてゐるだろう。

そこで、こんど、北海道でとれた「オホークの女」の上演は、その意味でも格別、ぼくには興味をかいことになったのだ。

北海道でとれた、とややふざけたい方をしたが、巨大な漁場北海道は、いまや演劇でもそのことの事実を示そうとしているようにおもわれる。高校生演劇のための創作劇のなかで、堂々と基地闘争のドラマが登場していくといふようなことも、内容をものがたる意

味での、その一つとして云えるだろう。

京浜協同劇団がさいくん上演した「メコンデルタ」は、その北海道の、やはり高校の教師である浅見祐治の作品である。

ムです。だから、この作品がほんとうのベトナムの一端をも写し得ていないと非難を甘んじて受けるつもりです。」これは作者のことばの一部分だが、実はずい分思い切った大胆なことばのようにぼくには思える。本来ならば、それでは一行も書けない筈なのだが、なにが作者をしてこの戯曲を書かせたが、なにが作者をしてこの戯曲を書かせた

べを知っている国、花も木も実も武器となる

國。おお不思議な国ベトナム。というのがあ

つて、「メコンデルタ」の作者はそれをうけ

て、「私はごく平凡な若者、日本の盛り場の

何處にでもいそうな若者とその家族を描くこ

とによって、私なりにうけとめた、不思議な

國ベトナムを再現したいという途方もない野

心を抱きました。」と、そもそものところを告白して見せてはいる。

だから、そこにはベトナム民衆の生活の実

情にそくした、ぬきさしならぬ、言葉や感情

のキメのこまかさといふものはない。協同劇

団の演出者が、稽古にとりくむ仕事の中で、全く新しい「メコンデルタ」の創作にひと

いことをやりはじめたといふきさつもそこ

にあつたのである。しかし、そのことにぼくはふれる必要はない。ただ、舞台を見た感想を語ればいいわけで、その限りでは、全体として、未完成の木彫りを見る魅力にとんでいる。人間や場景の奥行きのふかさが、そこで見せられている以上に深いものとして客席にしみとおつてくる。このふかさは、ベトナムそのものの深さ、ベトナム農民の生活のもの深さ、祖国に対するかれらの愛のそこいらぬ深さとしてひそんでいたのだったろうと思う。

「メコンデルタ」の演出者は、若いといふのではない、新手なのだった。彼が、長い演技者としての実歴をふまえて、この戯曲を、バシッと「演技」のめんでうけとめて見せたことが、演出術の迷路に入つてはいるようなくつとつては新鮮だった。舞台で、逃げようもない演技者が、そこで、悪びれずふんばつて見せるような芝居、それは、ありそうでなかなかないのだ。そこには新鮮な、新しい演技者の登場という産物もうんだのだった。

ただ、うらはらにやはり欠陥も生んだことを指摘しないわけにはいかない。それは、演技者が、それぞれ責任過重の力演劇になり、きそつて、戯曲の超課題までも語りかねない

気組みになったことだった。その少女やその青年が英雄であるということは観客が理解することであつて俳優個人の志向精神のようなものとダブつては嘘になるだろう。からだごとベトナムの土にまみれている老婆のつよさも、それは生活そのものの強さの筈なのだがた。どつしりとその俳優の意志のようなもので踏まえて見せたのでは、頼母しくはあっても、老婆の人間的な厚味としては出てこない。肯定人物に対する、迎えるような好意にみちた客席の反応には、ぼくたちが足もとを

すぐわれる危険なものを持っていることは先にも述べた。幕きれの、わが子がアメリカ戦車に体あたりして戦車もろとも爆死するのを目撃した母親の述懐には、母親自身の怒りや悲しみをこえて、その俳優のナマの感情が露呈する。メリハリのきいた立派なセリフになればなるだけ、役そのものからは遠ざかるのだ。

京浜協同劇団の舞台が、と云いきつては当らぬが、そういう説明過剰というか、意識が先行した創造上の貧しさというものは案外見かけるのである。「メコンデルタ」のあとに続いて上演された「漁船天佑丸」にも、批評

ということでは、先ずそこから話をしない訳にはいかない。

「天佑丸」では、それが一九〇〇年の自然主義戯曲の名作ということ、かさなって、演出、演技上の問題点となつたのだった。既に知られているようにこれは、素朴で強烈な、船主との雇傭漁民の抗争がテーマだ。たしかにこの戯曲の本來的な使命として、作者の強烈なヒューマニズムで観客を、漁民や寡婦の側で、ふるい立たせるということはある。

劇団も、この悲劇は、七十年後のこん日でも、決して、無くなつてはいらないという前提でとりあげているし、それはそれで良い。問題は、まるごとこの戯曲にもたれかかったときの古さ、時代的な古さ、人間愛そのものの古さが、この日の時点での肯定的なものとして表出されて来たときのとまどいである。それは、漁民の船主に対する、あるいは、労働者が資本家に対する、たたかいの感情、方法としても、無理になるだろう。

ひとつのが、ここに、クニエルチエといふ、夫と四人の息子を次々と海で失つてゆきながら、封建的なしがらみで、船王の温情により繋つて、ゴルキイの「母」などとは

その意味では、ぼくは、俳優座の「人形の家」における千田是也の妙手にかなりちがつた意味だが感心する。近代古典劇と現在の観客との接点というものを、それなりに解決して見せてはいるという点である。

ハイエルマンスの「天佑丸」について云えば、その局面の荒々しさにもかかわらず、ぼくは、こん日では、あれは、静かに演すべきだ。

戯曲のテーマをテーマとしてつとめれば、まるでちがつた母親が出てくる。これでもかこれでもかという彼女への迫しこみが、一つにはこのドラマの進展にもなつて、いるのだが、この役の演技者の表現は、終始、スキのない、目のつんだ芝居になつて、いるのだが、どうやら基調になつた感情は、この不合理に、私はこうして耐えています、という意識だ。しかし、この戯曲の本來的な使命として、作られた船主についても、その努力にもかかわらず、悪玉一辺倒の印象は免れない。

だとおもうのだ。ぼくはそこに、ぼくらの祖先の忍苦を見たい。屈従の悲惨さを見たい。聞き方を知らぬおろかなぼくらの祖父や祖母のまるごとの人間をいつくしみたい。そこから静かな憤りと、まるで様相をかえたこん日

のメカニックな体制に對して、じっくりと対決する心の糧をえたい。「天佑丸」上演の視点はそこにあつた、あるべきだったとぼくはおもうのだ。

隔絶の拒否について ——名古屋演劇集団——へ島▽——

黒沢参吉

『島』は隔絶の芝居です。あるいは隔絶を

埋めようとする、人間のやみがたい行為のドラマといえましょうか。

四幕の木戸玲子が、激情の中で栗原原学にぶつける『先生、なんでピカなんかに違ううちやつたの』というセリフは、その隔絶のむこうに見る死者への掉詞であり、より以上に生きのこつた自己への熱いいくしみであるために、美しく愚かであり、醜く痛切であります。

二三年目の八月六日一夜。

名古屋労演の自主企画による名古屋演劇集団『へ島』の舞台は、ほかならぬこの日に観せてもらつたこととダブつて、つよい印象を

きぎみつけられました。

市公会堂の二階席から、舞台はやや遠い。

しかしこの距離は、とくにこのごろ芝居をつくる人たちと、それをうける人たちの二つの息使いを、あわせてうかがう癖のついた私には適した距離です。客席を埋めていく人たちはおおむね若く、あの夏の日、栄養の足りない赤ちゃんであつたが、まだ生まれていなかつた人たちが大部分でした。当然のこととして、戯曲『へ島』がおしだす主題、隔絶のふかい裂け目を語りかけることによって、観客にかけわたしたい連帯の回復へのねがいが、この若い観客にそうしたものとして届く

『へ島』は成功だったとおもうのです。



「イルクーツク物語」のパンフから劇団『木々の会』についての概要を抜きがきすると、昭和三十三年冬に募集されたRCC（ラジオ中国）放送劇研究会が母体となり、三十五年十一月広島演サ協の演劇祭に出演する時、劇団名を「木々の会」とした。三十九年春、突然RCC放送劇団、楽団、合唱團全員首切りという事態がおこったことから、社会の矛盾を教えられ、社会と芸術の関りについて考えさせられた。三十九年から四十年にかけての年間五、六ヶ市町村の県内巡演の中で創作劇「若者たち」も完成させ、四十二年春に取り組み、その暮の劇團総会で劇團規約をつくり、劇團の目標も大ざっぱではあるがみつけることが出来た。そして念願の自主公演としてここに「イルクーツク物語」を実現させることとなり、今後も演サ協の活動に役立つたい——ということになる。

ついている。よくいえば町ねいな、わるく云えば解説的な「程のよい」つくり方に嗜みつきたい気もあります。演技者と役の間に、「つくる」ために介在するうすい皮膜のようなものが、もし、時間的に翻訳すれば何秒かのテンポのズレを生むのです。完熟した草の実がかすかな、空氣の揺れひとつに弾せてとぶ、その演技者一役の統一主体の緊張と凝縮と跳躍がみえにくいのです。このことについて、一緒に観た静芸の山崎欣太氏が、「ピースの課題に飛躍がとぼしい」と指摘したのは、私は正しくおもえます。

去年観せてもらった、△人間が闘うとき—二部△での、ナマな粗さに垣間みた演集の素顔の新鮮な魅力が、役と役とのぶつかり合い絡みあいの中で摩擦熱をおこしたら、私のもの、あるもどかしさは半減したろうし、プロセニアムをこえて人間の慟哭がより確かに客席をとらえたろうとおもえるのです。その上で戯曲△島△が古いか古くないか。それを、週刊誌などの速度で生産される、ミニスカートをはいたお婆さんのような芝居が新しさか、どうかの尺度ではかることはできません。

ただ、『なんばでも』あつた筈のやりょう

その上で、観客のそういう受けいれ方までふくめた舞台から感じた、あるもどかしさについて書きたいのですが、そのあたりになると、問題が演集にあるのか戯曲にあるのかで明瞭を欠くことになります。

もちろん、演集の舞台がすでに体質的にも

小林万吉

「イルクーツク物語」を観て

広島木々の会第一回公演

劇評 ■

「イルクーツク物語」のパンフから劇団『木々の会』についての概要を抜きがきすると、昭和三十三年冬に募集されたRCC（ラジオ中国）放送劇研究会が母体となり、三十五年十一月広島演サ協の演劇祭に出演する時、劇団名を「木々の会」とした。三十九年春、突然RCC放送劇団、楽団、合唱團全員首切りという事態がおこったことから、社会の矛盾を教えられ、社会と芸術の関りについて考えさせられた。三十九年から四十年にかけての年間五、六ヶ市町村の県内巡演の中で創作劇「若者たち」も完成させ、四十二年春に取り組み、その暮の劇團総会で劇團規約をつくり、劇團の目標も大ざっぱではあるがみつけることが出来た。そして念願の自主公演としてここに「イルクーツク物語」を実現させることとなり、今後も演サ協の活動に役立つたい——ということになる。

から、すべて絶ち切られたあげく、のこされた人間のしるしである双の掌に見入る幕切れの栗原学が、隔離をこばむたつた一つのやりようをどう行為するのか——が、原水禁世界大会を苦惱のなかで一四回かさね、広島・長崎をベトナムにくりかえさせないことを決意する私たには、見えなければならないという意味では作者の洩らした『古いねえ』を、文ナパームに灼かれたベトナムの母と子の写真、殺した裸の男たちをブルトーザで埋めているアメリカ兵の写真。いまのはやりでいえばショッキングなこれらの報道写真をみてさえ、たとえば同じ時間に私は何をしていたかを照合する、その目がくもりがちな『平和』のなかで、あれは八月九日！――

長崎大会で、抱かれておこなった渡辺千恵子さんの特別報告があります。

核兵器を世界から失くすために、それをつくり使う者をのぞいた人間の連帯のために、そのためにつた一つのやりようとして、生きる』という声を私はきいたのです。

私たちにはいま、新しい△島△を生むことで、隔離をはつきり拒み連帯の地下茎をはじめぐらす必要があるとおもいます。

ーリヤ、ピクトルを腰くつみこむことで、劇のテーマと深く関わっていたようだ。

演技ではセルジューク（栗栖）が、コミニストとしての信念を堅く持ち、周囲に影響を与える人間であることをわからせたし、彼が生きてきた道すじに於て味った喜び悲しみ、鬱いのにおい、彼個有のやさしさ、いたわりといったものを感じさせて素晴しかつた。それとジーンク（合田）の前へ前へ出る

逞しさ、ピクトル（合田）が随所でみせた少し身体を斜めにそりぎみにし、小柄であるといふ肉体的な条件を克服して役を創造しようとした試み、セルゲイ（近江）の自分の性格にひきつけ、ふつとわく、実感として役をこなした部分等は印象に残った。

ただ不満だったのは、それぞの役の形象が、もう一步二歩ふみこみ不足で表面的に終つており、個々の人物の本質に迫っていないなつたことが、感動の質を一定のものにとどめさせたよう思われる。特に各人物の人間性にふれた大事なセリフをおさえきつていなければ、劇の流れを單調にし諸人物を單純なものとして印象づけ、テーマをぼかしたのではなかろうか。演出意図としてパンフに書かれている『人間讃歌』ではなくたんなる恋愛

劇評 ■

グスコーグドリの伝記

——神戸四紀会—— 仲 武 司

去る四月二〇・二一日。神戸で「西リ演」

主催の「戯曲研究集会」がもたれ、研究資料として「西リ演」乃至はその仲間たちによる創作戯曲五篇の他に、グスコーグドリの伝記。（原作宮沢賢治、脚色広渡常敏—悲劇喜劇掲載）がとりあげられた。

その席上、「四紀会」から、「次期公演の候補作品として、グドリ」を考へておるが、

四紀会の今迄の上演作品の日常性・社会性のつよい、所謂リアルなものを支持した観客はどううけとめられるかが、不安である。劇団の創造のワクを抜け、さらに観客層の拡大を考えるとき、「グドリ」の上演は意欲をそそるのだが」という発言があつた。

七月二一・二二日（三回）神戸海員会館で

「グスコーグドリの伝記」が上演された。

一般的な傾向とはいえ、観客の八割までが若い女性で占められていたことに、改めて目を見張った。

宮沢賢治の「グドリ」の舞台化は、これまで主として児童劇、人形劇の分野で試みられており、「百姓の子、グドリが、農民を救うため、科学者として冷害対策に身を投じて、たった」この物語りは賢治が、当時東北地方に代表される農民の貧困、悲劇に対し科学への可能性に憧憬をこめてたくした物語として胸をうつ作品である。

広渡氏の脚色は、賢治のもつ現実感と憧憬との間にいききするロマンチズムとリリシズムを、今日の科学のあり方の問題として叙事的手法によって追求を試みた。そして今日の科学がなお「科学者グドリの死を必要としたこと」に、観客の思考を訴えている。

「四紀会」の上演数日後、観客との合評会が開かれた。その席上で出た意見は、所謂演劇通の、末梢的な技術論は別にして、(1)作品の意味はわかつた、しかし感動として残らなかつたという声もあること等、広島に於けるいかに自分の人生觀、人間觀を深め変革し新しい發見をしていったかという点での掘りさげの不足が浮かび上つた。自分の持つ情緒的記憶をくらませ、要求される役柄に迫つていく中で、俳優もまた自分の役との葛藤によつて新しい發見をし、新鮮な感動をもつて自己の内部をみつめるはずであり、自己変革がなされる時の充足感は彼の演技を内側から支え光りを放たせるものになると思われるが、どんなものであろうか。

ともあれよりよいものを不斷にめざし前進しつづける人間、労働者の豊かさ美しさの一端を伝えてくれた公演である。それは未来をみつめて真剣に生きようとする働くものの劇団によつて創られたことと切りはなして考えることは出来ないし、この劇団の持つ有利な条件—芸能員として働いていて首切りにあい文工隊を組織し、首切り撤回の鬭いを続けて

にポイントがおかれているかのよくな受けとめたをしたという声もきかれた。

なぜ表面的な形象に終るのかを考えてみると、俳優が役の人物を創造するささいにその人物を認識していく作業の中で、これまで自分が持つてた人生觀、人間觀を受けとつた役の持つだろうそれをてらしあわせながら、いかに自分の人生觀、人間觀を深め変革し新しい發見をしていったかという点での掘りさげの不足が浮かび上つた。自分の持つ情緒的記憶をくらませ、要求される役柄に迫つていく中で、俳優もまた自分の役との葛藤によつて新しい發見をし、新鮮な感動をもつて自己の内部をみつめるはずであり、自己変革がなされる時の充足感は彼の演技を内側から支え光りを放たせるものになると思われるが、

きた人たちを抱えこんでいる」と密接に結びついている。

最後にまとめてみると、今回の公演の成果として、第一に創造と普及を結合させた一千五百人动员のこと、次に逞しい劇団として飛躍したこと、民芸の「イルクーツク」より良い点が上げられるようと思う。その為には業余劇団の活動として画期的な成功であった。

なお蛇足乍らつけるとこの劇団の明日への注文として、創造的に高まるということが、運動の問題としてどうとらえているかとくつたという声もあること等、広島に於ける業余劇団の活動として画期的な成功であった。

本当に木々の会の皆さん、良い芝居をみせて下さつてありがとうございます。共にがんばりましょう。

（広島・月曜会）

ここで問題になるのは、(1)での、意味はわかるが「感動」がなかつた。という、観客がもとめた感動の質の問題であろう。「グドリ」の成長過程と科学者グドリが最後に身を挺して冷害を救うために火山島にむかう迄、その中で、別れた妹との再会や育ててくれた百姓との出会いをくめ、舞台上のグドリに対する同化作用の期待、そこに演劇的共感がもとめられなかつた不満である。

そして、実はこの種の要求期待が「四紀会」のこれまでの作品では満たし得たしそれが「四紀会」への支持であり、イメージでもあつたと思う。前記した「戯曲研究集会」での、「これまでの観客がついてくるか不安」は、現実にこの様な観客の意見としてかえってきた。しかし同時に「観客層」の「拡大」は(2)の様に上演を全面的に評価する意見の中にその可能性はあつた。

果して一見異つた二つの評価をどう受けと

めればよいのだろうか。「層」の拡大と、一舞台での実在感を求める、結果的にもそうなった。

「四紀会」が貢いてきた創造路線は「二分されるのだろうか?もしその不安があるなら、「今迄の層」と「拡大したい層」とにどの種

のギャップがあるのだろうか?

私の知人が、「やはりプレヒトが理解出来るのはインテリでないと……」つぶやいた。

たしかに一般論として観客層による作品への理解には観劇の経験をふくめ、その差異は認めざるをえない。だから、こそ「四紀会」

の「不安」と「意欲」があつたのだろう。しかし果して、『グスコープドリの伝記』のもつ課題が難解だったのだろうか。或は叙事的手法になじめないことが、ブレヒト・インテリゲンチャになるのだろうか。私はこの作品の場合そうは思はない。

「四紀会」の舞台にうつそう。

一口に云つて、役の人物を持続させる演技者の力量を感じた。しかし、その人物を演技者の中にもち込むことにリアリティを、この場合、写実的実感を求め、その時の、その人物の行動の課題をうすめていた問題である。演出乃至演技者は、この作品のあり方、主として叙事詩的演劇への配慮から、意識してそれを押えながらも、やはり無意識の中に、舞

己発見への感動を触発することが不充分におけるのは、いつものでなかろうか。

課題を観客に認識として高めえず、観客の自らは、あくまで劇団内部の、劇団主体の問題

ところ私は危惧を感じた。

「南大阪劇研」が黒沢参考作『おふくろの歌』の上演を企画していると聞いて、正直な

立つ企画であることへの不安であった。

私たちも過去、何回かの合同公演や、或は

公演による舞台を知っている。

勿論これらの公演には、それなりの意味な

り、理由があり公演体制によって、舞台成果

の評価を違えることはありえない。

ただ、合同公演や、贊助、客演を加えた公

演は、あくまで劇団内部の、劇団主体の問題

であり、例えそこに重要な意義があるにせ

一の数が、上演に必要な配役の半数に満たない状態であり、その不足を他のサークルや劇団、あるいは知人の援助によってはじめて成

立つ企画であることへの不安であった。

私たちも過去、何回かの合同公演や、或は

公演による舞台を知っている。

勿論これらの公演には、それなりの意味な

り、理由があり公演体制によって、舞台成果

の評価を違えることはありえない。

ただ、合同公演や、贊助、客演を加えた公

演は、あくまで劇団内部の、劇団主体の問題

であり、例えそこに重要な意義があるにせ

一の数が、上演に必要な配役の半数に満たない状態であり、その不足を他のサークルや劇団、あるいは知人の援助によってはじめて成

立つ企画であることへの不安であった。

私たちも過去、何回かの合同公演や、或は

公演による舞台を知っている。

勿論これらの公演には、それなりの意味な

り、理由があり公演体制によって、舞台成果

の評価を違えることはありえない。

ただ、合同公演や、贊助、客演を加えた公

演は、あくまで劇団内部の、劇団主体の問題

であり、例えそこに重要な意義があるにせ

一の数が、上演に必要な配役の半数に満たない状態であり、その不足を他のサークルや劇団、あるいは知人の援助によってはじめて成

立つ企画であることへの不安であった。

私たちも過去、何回かの合同公演や、或は

南大阪演劇研究会の教訓

——『おふくろの歌』上演に際して——仲 武 司

(関西芸術座、演出・文芸部)

いをおぼえたのはこの点にあつたのである。これらの問題は、単に叙事的演技の経験の有無にかえす問題でもない。作品の課題、エピソード、人物の形象、と一連の創造過程の中での論理の構築にその弱点があつた様に思う。

「四紀会」が貢いてきた創造路線は「二分されるのだろうか?もしその不安があるなら、「今迄の層」と「拡大したい層」とにどの種のギャップがあるのだろうか?

私の知人が、「やはりプレヒトが理解出来るのは、インテリでないと……」つぶやいた。

たしかに一般論として観客層による作品への理解には観劇の経験をふくめ、その差異は認めざるをえない。だから、こそ「四紀会」

の「不安」と「意欲」があつたのだろう。しかし果して、『グスコープドリの伝記』のもつ課題が難解だったのだろうか。或は叙事的手法になじめないことが、ブレヒト・インテリゲンチャになるのだろうか。私はこの作品の場合そうは思はない。

「四紀会」の舞台にうつそう。

一口に云つて、役の人物を持続させる演技者の力量を感じた。しかし、その人物を演技者の中にもち込むことにリアリティを、この場合、写実的実感を求め、その時の、その人物の行動の課題をうすめていた問題である。演出乃至演技者は、この作品のあり方、主として叙事詩的演劇への配慮から、意識してそれを押えながらも、やはり無意識の中に、舞

かあげられるが、その基調に、作品を貫く

課題に対し、共通の認識が前提となることは云うまでもない。さらに認識が思想として高まるほどそこにはアンサンブルを生みだす確固たる基盤をもつ。劇団の團結とか、統一といふことの本当の意味はここにある。

多くの合同公演や贊助出演が「交流」をうたい「運動」を強調し「観客へのアピール」をねらうこととはそれなりにうなづけるにしても、そのことが、作品への共通の認識や理解をうすめるならば、その成果は無に等しい。

私の最初いたいた危惧は、これらの問題がどう「劇研」の内部で問題意識として存在したかにあつた。前回の一般公演『黙秘』が「西リ演大阪プロック」の合評会で多くの批判をよんだ点は、劇団の中心的な活動家の人たちの中に、「芝居を見る目が肥えている」ことからか、「物まね的芝居づくり」に終始したことからか、演じたところにあつた。演技者のてんでバラバラの感覚的な経験主義が作品の主題を不鮮明にして、演出も又戯曲にもたれこんでしまつた。『黙秘』という戯曲の中に、うまくつくられすぎた人物配置や、人間像が、その弱点をより拡大したことであつたろう。さらに客演した「職業劇団」の演技者にも問題があつた。

かあげられるが、その基調に、作品を貫く課題に対し、共通の認識が前提となることは云うまでもない。さらに認識が思想として高まるほどそこにはアンサンブルを生みだす確固たる基盤をもつ。劇団の團結とか、統一といふことの本当の意味はここにある。

た。いづれにしても、『黙秘』の舞台からは、は、「人間の可能性と尊厳」は感じられない。今回の『おふくろの歌』への危惧はそれらのことをふくめてあつた。

結論をいうと、『おふくろの歌』は成功した。最後の幕がおりるのをまって客席からはおしみなき拍手があがつた。この企画を形の上からだけみて危惧をもつた私にとって、それはうれしい錯覚であった。それだけに「劇研」の舞台が胸に迫つた。

ここで、『おふくろの歌』についての個々の批判、『人物の行動のティールの粗雑さ』や、『日鋼室蘭の労働者としての形象』さら

に主人公『沖野すず』を浮かびあがらせる密度の不足等々を指摘するのは容易であるが、

私にとっては、むしろ「劇研」がこの『おふ

くろの歌』の舞台化に当つて、そのパンフレ

ットで演出の赤松君が述べている様に、「こ

れどもそこには、芝居を見る目が肥えている

ことからか、「物まね的芝居づくり」に終始

したことからか、演じたところにあつた。演技者のてんでバラ

バラの感覚的な経験主義が作品の主題を不鮮明にして、演出も又戯曲にもたれこんでしまつた。『黙秘』という戯曲の中に、うまくつくられすぎた人物配置や、人間像が、その弱点をより拡大したことであつたろう。さらに客演した「職業劇団」の演技者にも問題があつた。

た。いづれにしても、『黙秘』の舞台からは、は、「人間の可能性と尊厳」は感じられない。今回の『おふくろの歌』への危惧はそれらのことをふくめてあつた。

結論をいうと、『おふくろの歌』は成功した。最後の幕がおりるのをまって客席からはおしみなき拍手があがつた。この企画を形の上からだけみて危惧をもつた私にとって、それはうれしい錯覚であった。それだけに「劇研」の舞台が胸に迫つた。

ここで、『おふくろの歌』についての個々の批判、『人物の行動のティールの粗雑さ』や、『日鋼室蘭の労働者としての形象』さら

に主人公『沖野すず』を浮かびあがらせる密度の不足等々を指摘するのは容易であるが、

私にとっては、むしろ「劇研」がこの『おふ

くろの歌』の舞台化に当つて、そのパンフレ

ットで演出の赤松君が述べている様に、「こ

れどもそこには、芝居を見る目が肥えている

ことからか、「物まね的芝居づくり」に終始

したことからか、演じたところにあつた。演技者のてんでバラ

バラの感覚的な経験主義が作品の主題を不鮮明にして、演出も又戯曲にもたれこんでしまつた。『黙秘』という戯曲の中に、うまくつくられすぎた人物配置や、人間像が、その弱点をより拡大したことであつたろう。さらに客演した「職業劇団」の演技者にも問題があつた。

た。いづれにしても、『黙秘』の舞台からは、は、「人間の可能性と尊厳」は感じられない。今回の『おふくろの歌』への危惧はそれらのことをふくめてあつた。

結論をいうと、『おふくろの歌』は成功した。最後の幕がおりるのをまって客席からはおしみなき拍手があがつた。この企画を形の上からだけみて危惧をもつた私にとって、それはうれしい錯覚であった。それだけに「劇研」の舞台が胸に迫つた。

ここで、『おふくろの歌』についての個々の

批判、『人物の行動のティールの粗雑さ』

や、『日鋼室蘭の労働者としての形象』さら

に主人公『沖野すず』を浮かびあがらせる密度の不足等々を指摘するのは容易である。

私にとっては、むしろ「劇研」がこの『おふ

くろの歌』の舞台化に当つて、そのパンフレ

ットで演出の赤松君が述べている様に、「こ

れどもそこには、芝居を見る目が肥えている

ことからか、「物まね的芝居づくり」に終始

したことからか、演じたところにあつた。演技者のてんでバラ

「おふくろの歌』を上演した。しかし人間の可能性と尊厳は感じられない。今回の『おふくろの歌』への危惧はそれらのことをふくめてあつた。

結論をいうと、『おふくろの歌』は成功した。最後の幕がおりるのをまって客席からはおしみなき拍手があがつた。この企画を形の上からだけみて危惧をもつた私にとって、それはうれしい錯覚であった。それだけに「劇研」の舞台が胸に迫つた。

ここで、『おふくろの歌』についての個々の

批判、『人物の行動のティールの粗雑さ』

や、『日鋼室蘭の労働者としての形象』さら

に主人公『沖野すず』を浮かびあがらせる密度の不足等々を指摘するのは容易である。

私にとっては、むしろ「劇研」がこの『おふ

くろの歌』の舞台化に当つて、そのパンフレ

ットで演出の赤松君が述べている様に、「こ

れどもそこには、芝居を見る目が肥えている

ことからか、「物まね的芝居づくり」に終始

したことからか、演じたところにあつた。演技者のてんでバラ

「おふくろの歌』を上演した。しかし人間の可能性と尊厳は感じられない。今回の『おふくろの歌』への危惧はそれらのことをふくめてあつた。

結論をいうと、『おふくろの歌』は成功した。最後の幕がおりるのを買って客席からはおしみなき拍手があがつた。この企画を形の上からだけみて危惧をもつた私にとって、それはうれしい錯覚であった。それだけに「劇研」の舞台が胸に迫つた。

「雪崩」の創造体験（その一）

現地調査の報告

藤沢 薫



ことがおこっているという感覚だけが残り、冷静に考えることが出来ない。老婆の言葉がいつまでも耳に残り、頭の中をぐるぐるかけめぐる。

翌日、離村寸前にあるという別の部落に向

つて峯山町を出発した。途中、すでに昨年村を去り町場で機屋をやっている人たちのこと聞き、その人たちにも会うことになった。まだ三十過ぎであろうこの人は、山の生活について止めどなくエネルギーに語り続けた。「重い炭を背おつて雪の中を歩いた、疲れて来るとガバッと雪に顔をよせるように俯けに休んだ、そうすると荷物の重みで一定時間眠つても眼を覚ますのですよ」決してそれはつらい思い出なのではない。この労働が生活の全てだったのだ。「私はこの町へ来てもやっぱり死ぬまで住山の炭焼きです」これまで奪われまいという精一杯の思いで声がふるえていた。嫁入りの折箱を深い谷底に落としてしまい、凍てついた谷の斜面を命がけで降りて拾った話、この折箱は金を出しては買えないという価値観念、人間をぬきにした合理主義の物質文明に対する痛烈な批判だ。そしてこの人は最後に「私は故郷を追われた、世の中の流れにおし流されるかも知れませんが、必ず第二の故郷を取り返します」この言葉がグンと胸に突きさり、こいつを、この

創作劇「雪崩」は、離村があつぐ奥丹後峯山町の中学校教諭下戸氏が農村の深刻な実態にふれ仕事のあい間を見てレポートしているという話を聞いて、劇団との間に劇化の話がまとまり、先ず現地のナマの農民の対話を書きつらねていったことから始った。大学ノートにぎっしり書きこまれた記録を劇化するまでに二年の歳月が必要だった。数回の改作を重ねて、やつと上演台本なるものが出来た。作者は調査に調査を重ねて、いわば足で書きあげた嘘のない生活記録なのだ。農村問題の通り一べんの認識だけではどうてい割りあげることは出来ない。

読み合せが半ばに入った八月初旬、全員で現地へ出かけることにした。興味本位の観察ではない。一人一人が真実現地の農民と共に考えよう、語り合おう、だが本当のことを語ってくれるだろうか、手厳しい反撥をうける

のではあるまいか、不安と期待の入り混つた一種厳肅な氣持で現地調査に向つた。

モデルになつた部落は三つある。私たちを乗せたマイクロバスは、夏草のおい茂つた道を五十米程進んではたしかめ、たしかめしながら最初の部落へ向つた。この部落は文化行政の昔、竹やりやむしる旗をもつた一揆の農民たちが丹後中を歩きまわつて最後の勝どきをあげたという云い伝えがある。昨年この部落で離村がささやき始められた頃、一家の惨殺事件があり、それをきっかけに殆んど人が村を去り、今はもう二軒を残すのみとなつたという。

部落は無気味に静まり返つていた、百年の歴史をもつ合掌づくりの家々はずつしりと土に根をおろし、ところどころ雨戸がはずされて空洞のように見える、床板に置きざりにさ

れた綿のはみ出した蒲団や、牛小屋の前に掛けられた鞍、散らばつた茶わんや鍋蓋から息づかいが聞えるようになつたのか……わからんですう……テレビも買った、華やかな剣舞が見事だったという祭の話を電話もついた……ほんとに……何の楽しみもないし、毎日泣いてるんですね」と笑つて見せながら、カサカサした手で涙をふいた。

電話もついた……ほんとに……何の楽しみもないし、毎日泣いてるんですね」と笑つて見せながら、カサカサした手で涙をふいた。長い労働で殆んど顔が地面につく程腰の曲った老婆がいた。その老婆は家の前で無表情に鎌をといでいた。ドキリとする感銘を受けた——この人たちの全てを奪つてしまふ、あの労働さえ奪つてしまふ——「お婆さん、ありがとうございました、どうか、長生きして下さい」これ以上の言葉は言えない、頭を下げてこの部落を立ち去つた。これは大変な

聞、ここまで一日二往復のバスが通つていい。小中学校、農協の支所があるこの部落から、谷川沿いの道を歩いて登ること更に一時を一列に並んで歩く。四糠程いって峠をこえたところに、百年昔の面影をそつくりそのまま残したような家々が山肌にひつそりと点在する吉津部落があつた。

七軒ある家々から十数名の人たちが集まつてくれた。磨かれて黒光りのする床に円座になり山の暮しの話を聞いた。冬は軒下まで雪にうずまり、夏はあつと云う間に、たが道をふさいでしまう。この厳しい自然との闘いを語る雪やけした赤黒い顔は、明るく誇らしげだった。この冬を待たずに村を出る人たちとは思えない。しかし毎年一軒二軒と山をおり何町歩かの田畠が荒地になつてゆく、人手がないところでは次第に生きることがもう不可能になる、国有地として買われるところはよいが、われわれは裸一貫で放り出される。おだやかな口調の中に、きびしい憤りがこめられていた。

私たちはここで大へんな歓待をうけた。わ

れわれのために餅をつき、ぱた餅をつくつてくれたのだ。久しく忘れていたものをとり戻したように嬉しかった。その上芝居の小道具に使う、「かんじき」、雪靴、ワラ表等を貰つた。付け方を教わりながら又しても物の価値や人間同志のつながりについて考えさせられた。こいはず町に氾濫しているビニールの文化製品とは大違いだ。私たちはお礼にありあわせの小道具を使い、ズボンにシャツの出でたちで「佐度狐」を見つけて貰つた。別れぎわもう日は暮れかけていた。この家の主人は夕陽があざやかな光と影の対象を見せる山肌の段々畑を見ながら「もう、ここへ戻つて来ることは恐らないでしよう」と語った。その眼はたまらなく悲しかった。私たちは貰つた道具をしつかりかかえ手を振り振り、夕暮れの山道を下の部落へと急いだ。

この味土野部落は数ヶ所にスピーカーをつけた有線放送がある。分校の先生が今晚の座談会のことをつげて呉れたおかげで、公民館には三十名近くの人たちが集つた。ここでは比較的落着いた話が出来た。息子に嫁が来ない、将来に希望がないためここで働くても苦労のしがいがない、離村の原因については理解が出来た。だがそのことをどう考へてゐるか

については「仕様がなえですな」と云つたきり殆んど的人が語らうとしなかつた。只一人息子が統一劇場に行つているというKさんだけが、「政府のやり方に激しい怒りをぶちまけ、「たとえ、わしゃ一人になつても村に残る」と云い切つた。

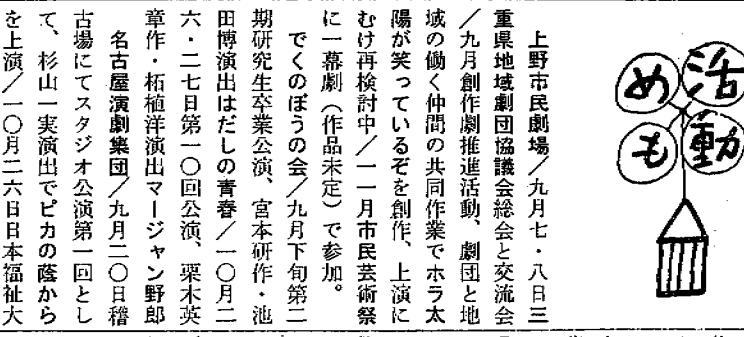
ここで私たちは、この辺に古くから伝わる「こだいじ」という歌をおそわり、よければ益踊りも教えてほしいとお願いして見た。もう時刻はとっくに十二時を過ぎて静まり返つた部落に時ならぬ太鼓の音が響きわたり益踊りがはじまつた。腰のまがつた老婆さんも踊つてくれた。Kさんも拳をつきあげ独特の力強さで真剣だ。私たちは踊りながら「ここで生きたい、ここで働きたい」という熱い願いがわきあがつて来るのを全身で受けとめ、踊り続けた。

同時に私たちはこの公演の中でのんななつた、現地で肌身に感じとった様々なことが現実の一端を描くことに成功した。

この体験は「雪崩」の創造に大きな力となつた、現地で肌身に感じとった様々なことが現実の一端を描くことに成功した。

京都でもこの「雪崩」公演は予想以上の反響を生み、労働者は根柢のところで自分たちの社会現象として受けとめて呉れだし、又進んだ考へをもつた人たちの中にも、どこかで社会の反動的な流れのなかに自分を乗せていく、実利的な考へ方に對する、一つの警告となつたようだ。急激に移り変る現代の状況の中で本質的なところでの歯止めがいま一層必要であるように思われる知らない。

(劇団京芸)



上野市民劇場／九月七・八日三重県地域劇団協議会総会と交流会／九月創作（作品未定）で参加。でくのぼうの会／九月下旬第二期研究生卒業公演、宮本研作・池田博演出はだしの青春／一〇月二六・二七日第一〇回公演、栗木英一・杉山一実演出でビカの蔭からを上演／一〇月二六日本福祉大	一月八、九日市芸術祭參加・創立二〇周年記念公演第三回として、作間雄二脚色・若尾正也演出おりん口伝会場は名古屋市公会堂。	菊池寛作父帰る／一月多田徹作を見る夕、宮本研作人を喰つた話	力劇団静芸／八月三一日ビカの蔭から市内公演（自主公演）／九月一日ビカの蔭から藤枝市公演（主催静岡労演）／一月六日秋の定期公演作品未定／一月二三日県	一月八、九日市芸術祭參加・創立二〇周年記念公演第三回として、作間雄二脚色・若尾正也演出おりん口伝会場は名古屋市公会堂。	菊池寛作父帰る／一月多田徹作を見る夕、宮本研作人を喰つた話	力劇団静芸／八月三一日ビカの蔭から市内公演（自主公演）／九月一日ビカの蔭から藤枝市公演（主催静岡労演）／一月六日秋の定期公演作品未定／一月二三日県
上野市民劇場／九月七・八日三重県地域劇団協議会総会と交流会／九月創作（作品未定）で参加。でくのぼうの会／九月下旬第二期研究生卒業公演、宮本研作・池田博演出はだしの青春／一〇月二六・二七日第一〇回公演、栗木英一・杉山一実演出でビカの蔭からを上演／一〇月二六日本福祉大	一月八、九日市芸術祭參加・創立二〇周年記念公演第三回として、作間雄二脚色・若尾正也演出おりん口伝会場は名古屋市公会堂。	菊池寛作父帰る／一月多田徹作を見る夕、宮本研作人を喰つた話	力劇団静芸／八月三一日ビカの蔭から市内公演（自主公演）／九月一日ビカの蔭から藤枝市公演（主催静岡労演）／一月六日秋の定期公演作品未定／一月二三日県	一月八、九日市芸術祭參加・創立二〇周年記念公演第三回として、作間雄二脚色・若尾正也演出おりん口伝会場は名古屋市公会堂。	菊池寛作父帰る／一月多田徹作を見る夕、宮本研作人を喰つた話	力劇団静芸／八月三一日ビカの蔭から市内公演（自主公演）／九月一日ビカの蔭から藤枝市公演（主催静岡労演）／一月六日秋の定期公演作品未定／一月二三日県
上野市民劇場／九月七・八日三重県地域劇団協議会総会と交流会／九月創作（作品未定）で参加。でくのぼうの会／九月下旬第二期研究生卒業公演、宮本研作・池田博演出はだしの青春／一〇月二六・二七日第一〇回公演、栗木英一・杉山一実演出でビカの蔭からを上演／一〇月二六日本福祉大	一月八、九日市芸術祭參加・創立二〇周年記念公演第三回として、作間雄二脚色・若尾正也演出おりん口伝会場は名古屋市公会堂。	菊池寛作父帰る／一月多田徹作を見る夕、宮本研作人を喰つた話	力劇団静芸／八月三一日ビカの蔭から市内公演（自主公演）／九月一日ビカの蔭から藤枝市公演（主催静岡労演）／一月六日秋の定期公演作品未定／一月二三日県	一月八、九日市芸術祭參加・創立二〇周年記念公演第三回として、作間雄二脚色・若尾正也演出おりん口伝会場は名古屋市公会堂。	菊池寛作父帰る／一月多田徹作を見る夕、宮本研作人を喰つた話	力劇団静芸／八月三一日ビカの蔭から市内公演（自主公演）／九月一日ビカの蔭から藤枝市公演（主催静岡労演）／一月六日秋の定期公演作品未定／一月二三日県
上野市民劇場／九月七・八日三重県地域劇団協議会総会と交流会／九月創作（作品未定）で参加。でくのぼうの会／九月下旬第二期研究生卒業公演、宮本研作・池田博演出はだしの青春／一〇月二六・二七日第一〇回公演、栗木英一・杉山一実演出でビカの蔭からを上演／一〇月二六日本福祉大	一月八、九日市芸術祭參加・創立二〇周年記念公演第三回として、作間雄二脚色・若尾正也演出おりん口伝会場は名古屋市公会堂。	菊池寛作父帰る／一月多田徹作を見る夕、宮本研作人を喰つた話	力劇団静芸／八月三一日ビカの蔭から市内公演（自主公演）／九月一日ビカの蔭から藤枝市公演（主催静岡労演）／一月六日秋の定期公演作品未定／一月二三日県	一月八、九日市芸術祭參加・創立二〇周年記念公演第三回として、作間雄二脚色・若尾正也演出おりん口伝会場は名古屋市公会堂。	菊池寛作父帰る／一月多田徹作を見る夕、宮本研作人を喰つた話	力劇団静芸／八月三一日ビカの蔭から市内公演（自主公演）／九月一日ビカの蔭から藤枝市公演（主催静岡労演）／一月六日秋の定期公演作品未定／一月二三日県

土の会／第七回期生発表会九月

八月初台区民館／第三回公演二

ばやしひろし作・山村金平演出

けない黒板／一月八、九日豊島公

会堂／一二月一日第六回東京効く

ものの演劇祭にて書けない黒板上

演、会場は社会文化会館。

劇団さっぽろ／八月二二日／一

一月上旬札幌市内道央地区学校公

演、小学校フレーメンの音楽は中

学校トタンの穴は星のよう／一一

月六、七日合同教研全道大会参加

予定。

劇団やまなみ／第四〇回公演小

山祐士作・梅津幸三演出泰山木の

本の下で一〇月二〇日県民会館大

ホール。

予定。

劇団京芸・人間座合同公演／黒

沢参吉作・藤沢葉演出金魚修羅記

九月二十五と二九日京都会館、この

公演は京都労演の九月例会として

とりくまれている。

南大阪演劇研究会／春の公演に

報告をうけ、夜は福岡現代劇場公

演三角帽子を観劇、第二日一般報

劇團黒沢泰吉作おふくろの歌をやりま

したが秋の公演として浅見祐治作

メコンデルタを上演します。ベト

ナム人民支援行動の一つとして詩

の会、うたごえ、人形劇、サーク

ル等各ジャンルによりかけべトナ

ム人民支援の夕として成功させた

に新しい演出者林田時夫を中心

に結集しています。

劇団なぎ（大阪）／八月よりと

りくんだ大阪城東地域における土

曜劇場（文工班）はくろだいさお

作「とんだ難産」を集団改修貧乏

神退治として一〇月末まで毎土曜

上演中、目下一月よりはじめる

お母さんと子どもの劇場のための

レパートリイを選んでいます。

劇団京芸・人間座合同公演／黒

沢参吉作・藤沢葉演出金魚修羅記

九月二十五と二九日京都会館、この

公演は京都労演の九月例会として

市において二一集団五二名の結集

西リ演総会／八月三、四日福岡

同、名古屋演集、運営委劇団／札

幌新劇場、仙台小劇場、労芸、か

戯曲 〃九〇〇一列車接近〃

島 源 三

ひと。

駅長—古田川駅長

清水—助役

石田—運転掛

がんさあ—転てつ掛

伍長—操車掛

ガチャヤさ—構作掛

ヨツチン—〃

女郎—〃

久保—臨時雇用員

宮—貨物掛

森—出札掛

青田—改札掛

辻—駅務掛

チ一ちゃん—日通事務員

男十新聞記者

とき。 真夏

——装置はかならずしもリアルに作らなくとも出来れば簡単に積木式で各場に変化を与える様にすればよい。——

——幕一場——構内詰所——
外で入換の音。女郎ひとり鼻唄で昼飯の支度をしている、時々外へ出てキヨロキヨ

ロ見まわし支度をつづける。室の端に流し台、その横に電熱器があり、ハンゴウが乗っている。その周辺に三つほど小さな鍋やハンゴウが置いてある。

室外にはコンロがあり、ナスビを焼いている。

列車がホームへ入り「古田川……古田川」とマイクの声小さく聞える。暑い熱風が入りこむ。

女郎 文句言うんじやないの、こりやあなあスカ。
チ一ちゃんが、(念をおす様に)わざわざ、おめえに持つて来てくれたんやぞ、ええ子やなあ、あの子、でえぶん、おめえに惚れとるな。

ヨツチン チエ。これ冷やいといってくれよ。道路でひろったんや。

女郎 ヤイヤイ。ところで買い出し列車、いま着いたが、いつもの魚屋まだ通らんか

で開催、第一日一般報告と各劇團報告をうけ、夜は福岡現代劇場公演、二五日掛川市で実施。参加劇團は北海道から大阪、広島からは西リ演ゼミナール／八月二四、東リ演劇研究会／春の公演に報告をうけ、夜は福岡現代劇場公演、二五日掛川市で実施。参加劇團は門劇團グループから青年劇場を選出。

未来、闘芸、四紀会、事務局長II

議長II藤沢、猿渡、運動方針、綱領規約改正を探査

(新運営委員会で決定)を選出。

東リ演総会／八月二十五、二六日

掛川市で一七劇團代表でひらかれて二集団が西リ演加盟を決定。

東リ演総会／八月二五、二六日

掛川市で一七劇團代表でひらかれて二集団が西リ演加盟を決定。

劇團の团结新人教育、地域との連帯、婦人劇團員の四テーマで五

分科会をひらき、最後に七〇年へむけての創造と連帯の強化を決議、盛会裡に幕をとじた。

劇團の团结新人教育、地域との連帯、婦人劇團員の四テーマで五

分科会をひらき、最後に七〇年へ

の薩からモダル上演。二五日は

演土屋議長も参加して三四団体、

一六六名。二四日は岐阜はぐるまが人を喰つた話、立川協同がビカ

らつかせ、岐阜はぐるま、及び専門劇團グループから青年劇場を選出。

一六六名。二四日は岐阜はぐるま

が人を喰つた話、立川協同がビカ

女郎 通つたら呼んでくれや。

ヨツチン "OK." (入つて来て) そうそう

女郎さ、公安と一緒に駅長が、本線の辺を

ウロチョロしどつたで、この前みてえに見つかると駅長、勤務中にめしの支度するなつて、どなりやあがるで、注意してちようよ。(去る)

マイクの声小さく「次は二日町……」とつげてゐる。

入換の音。

女郎 (外で) いけねえ。もう敵機来襲だ。

(コンロを持つて入つてくるが、隠す場所がないので、持つたままうろうろしている。しかたなしに物置きの中へ隠し、あわて電話にかかる。駅長入つてくる、室内をメガネ越しにじるりと見渡し、窓の外を見たり、流し台のスイカをつづいて廻る。)

女郎 (電話に出て) 「はいはい……ああ、そうですか……エエ?……変更、北海道へ、はい、わかりました。」(切る)ああ、駅長さん、暑いですね、構内巡視、いや、御苦労さんです。

駅長 作業着をちゃんと着ていろと言つたのか。

ガチャさ 女郎。めし喰えるか?

女郎 もうちょいしょうやね。

がんさあ チエ。助役さんよ、十二号のボイント、ボルトがゆるんで、まんだバカになつとるなも、今は村岡から車が出てこんでええが、事故でも起きたら遅いで、早う直す様に言つといくんせえよ。

石田 駅長には言つといたんやがなあ、わかつた。

ヨツチン 女郎さ。俺が行つたあとすぐ、おやじ來たやろ。

女郎 ほいな、タチの差やつたぞ、コンロ隠すとこあらへんやろ、物置きん中へ入れといたら駅長、ここまで来て、あの獅子鼻

に、なんだ、その恰好は。

女郎 すいません。つい、暑かつたもんで。

駅長 何か、くさいな……

女郎 はあ? くさい?……そうですね、

(自分の着ているランニングをかい) くさい。実際にくさい。なにしる五日間も洗つてないもん……エヘヘ……

駅長 くさい。(物置きの方へ近よる)

女郎 (大声で) 駅長さん。……あの……公

安の人人が呼んでおりますよ。

電話鳴る。

女郎、駅長を外へつれ出そと懸命になつていい。

女郎 (外で) あれ? 今、あそこに居たのに……おかしいなあ。

駅長 列車通過していく。

女郎 ……石田助役に言つときたまえ、もう

ぼちぼち本屋へ、町長や町の重役連中が御召列車を迎えておみえんなるで、あんまり変な恰好で本屋へ出入りしない様にわしが言つてたってな。

女郎 はい。

駅長 それから、窓にぶらさげたる、ひとつもないの、あれもしまつておきたまえ。

女郎 はい。

女郎、駅長の後姿にペロリと舌を出し、あわて物置きからコンロを取り出す。

女郎 このクソ暑いのに、こんなもん着とれますかいな。(作業着を脱ぎさて、コンロの上のナスビをつまんで) チー。真黒けや。

エエ? 本当に、やつぱり秋山鉱山となると違うね、エエ? 村岡? あかん、あかん、あそこは今、あの調子でしょ、この前も杉浦課長が来たで、親睦会から旅行に行くで、又ひとつ例年の様に付合わしたんやけど、てんで……それに比べると、さすがは秋山鉱山や……いやほんと、……ヤイヤイ(笑い) ほややなも、現物よりその方がええやろ、向うに行きやあ、なんでも売つとるんやで、ホン、ああ、ほうかな、どうもすんませんでした。おおきに。」(切る) 三十本か……無理しゃがつたな。

女郎 待つとつてちようよ、……「はい構内詰所。……ああ、遠藤さん。ほんほん……

ガチャさ ほんでわしゃあ、映画の方がええちゅうのに、おめえさん等が実演の方があんまりがあるでって無理やり、ひっぱつてく

員じやつたと思うが。

石田 ガチャさ。秋山へ請求したんか?

ガチャさ (ハハハ) へへへ……

がんさあ ほんでわしゃあ、映画の方がええちゅうのに、おめえさん等が実演の方があんまりがあるでって無理やり、ひっぱつてく員じやつたと思うが。

石田 ガチャさ。今年はふんばつしやがつた

駅長 作業着をちゃんと着ていろと言つたの

列車通過していく、外で魚屋の呼ぶ声。

クンクン、やりながら、くせえ、くせえつてくる。ワイシャツの汚れている者、ナップ服の者、半袖の者さまざま、皆麦ワラ帽子をかぶつていて。

女郎 作業着をちゃんと着ていろと言つたのに、なんだその恰好は、……と、駅長。がんさあ おれ達を殺す氣かつて言つてやれ。

伍長 ああ暑、どうや、まんだ冷えとらんか。

ガチャさ 女郎。めし喰えるか?

女郎 もうちょいしょうやね。

がんさあ チエ。助役さんよ、十二号のボイント、ボルトがゆるんで、まんだバカになつとるなも、今は村岡から車が出てこんでええが、事故でも起きたら遅いで、早う直す様に言つといくんせえよ。

石田 駅長には言つといたんやがなあ、わかつた。

ヨツチン 女郎さ。魚屋。

女郎 (外へ) 今、行く。

ヨツチン 買つて来たるわ、三十円徵收。

全員、ボックスや上着から金を持ってく

る。

女郎 そうそう、秋山鉱山から電話があつて

各班へビール三十本づつ出すつてさ。

伍長 ヘエー、今年はふんばつしやがつた

がんさあ ほんでわしゃあ、映画の方がええ

ちゅうのに、おめえさん等が実演の方があん

まりがあるでって無理やり、ひっぱつてく

員じやつたと思うが。

がんさあ なにこきやあがる。助役さん。こ
んどは、わしがえとこへ連れてくで、あ
んな、うすぎたねえ小屋やねえんな。

石田 ヘエー そんなええとこあるんか?
がんさあ ほいな オッペエのたれ下った様
な、バアちゃんやねえんな、若けばピチビ
チした。

石田 若いピチビチした。
がんさあ 先月なも、二日町の駅からも行つ
たんやと、みんなもう、たまらん言つとつ
たぞ。

石田 あんなものどこがええんや、女がハ
ダカで尻ふって踊るだけやに。

石田 そらな、女郎は面白ねえかも知らん
が、……ええなあ、なあ、ガチャさ。

ガチャさ 女郎は女のハダカより、男のスト
リップの方がええんやで。

女郎 (鼻をしかめて) フン。

全員の笑い。ヨツチン紙包みを持って入
つて来る。

ヨツチン さあ、ピチビチしたサンマだよ。
石田 ピチビチ?……(想い出した様に笑い
出す)

がんさあ ピチビチか。(皆も笑いこける)
女郎 (鼻をしかめて) フン。

全員の笑い。ヨツチン紙包みを持って入
つて来る。

ヨツチン さあ、ピチビチしたサンマだよ。
石田 ピチビチ?……(想い出した様に笑い
出す)

がんさあ ピチビチか。(皆も笑いこける)

全員石田について、一番線と声を出し合
図を書く。

石田 二番線。1↑↓2↑↓4 (左手は以後全部
一番線と同じ右手を左右に二回動かす)
全員 二番線。

全員石田について、一番線と声を出し合
図を書く。

石田 三番線。1↑↓2↑↓4 (右手をM形に動か
す)

全員 三番線。
清水 清水助役、久保を連れて入つてくる。

石田 四番線。3↑↓2↑↓1 (数字の4を裏か
ら見た様に画く)

全員 四番線。

清水 石田さん。訓練中の所、悪いんやが、
この子、久保って言うんや、福山駅へ転勤
した田中の代りに、臨雇でここへ回されて
来たで、一つ面倒みたつてちよう。

久保 久保です、よろしゅうたのんます。

久保 はい。どうもすんませんでした。

石田 ほう、田中の代りにや。
清水 (久保に) ええか、この人が構内の助
役さんや、わしは乗客の方の助役やが、構
内作業のことは、この助役さんになんでも

間くんやぞ。(皆に) 半年ぐれえ駆手をや
つとつたそうやが、構内へ出るのは初めて
やで、みんなもたのむは、そうそう、停年
で昨おととしやめた、次郎さの息子や。
久保 ……去年の暮れ、中氣で倒れ、いま寝
たり起きたりです。

伍長 次郎さの、ヘエー、そう言やあ、どつ
か似どるな、どうや、おやじ元氣か?

久保 ……去年の暮れ、中氣で倒れ、いま寝
たり起きたりです。

石田 ……あんな丈夫やつた人が、……

清水 じゃあ石田さん。わしの方はもう用件
も済んだで、構内でも案内したつてちょ
う。

石田 はい。

清水 (書に) それからなあ、久保の保証人
はうちの駅長やで、よろしくたのむは、じ
あ久保。しつかりやれよ、わからんこと

はなんでも、助役さんやみんなに聞いて、
それから駅長さんの顔をぶぶさん様に、
な。

石田 ほう、田中の代りにや。
清水 去る。

清水去る。

石田 ほう、田中の代りにや。

石田 ほんとや。

がんさあ (石田に) 駅長の顔つぶすって、
どんなんことやな?

石田 (苦笑) ……

伍長 がんさあの様にガラが悪くなるなつて
ことよ。

ガチャさ ……次郎さ、中氣になつてまつた
か。

がんさあ あれもここで、徹夜して、家へけ
えつては寝ずに百姓やりようつて、……と

ガチャさ ……次郎さ、中氣になつてまつた
か。

がんさあ あれもここで、徹夜して、家へけ
えつては寝ずに百姓やりようつて、……と

ガチャさ ……次郎さ、中氣になつてまつた
か。

がんさあ あれもここで、徹夜して、家へけ
えつては寝ずに百姓やりようつて、……と

ヨツチン チエ。バツかみてえ。おい、本日
のおかず代、二十八円。(貯金箱の様なも
のを持ってきて) おつりは、お茶代と。
石田 ほうや、忘れとつたが明け番の連中が
冷麦、残してつたぞ、夜食の残りやつて外
にぶらさげたるそや。

女郎 冷麦が?(外へ出て) ほんとや。

伍長 おい。めし、まんだかよ。

女郎 (洗面器に入つた冷麦を持ってくる)
めしぐれえ、ヘソの緒、切つてからずうつ
と喰つとるんじやろ、ガツガツしんさる
な。

がんさあ 女郎、その辺の入れもんよこせ、
腹がもたん。

ガチャさ わしも。

女郎 すぐ、めしやがな。

がんさあ それまで、もたんのじや。わしら
どん百姓は、育ちが悪いで。

ガチャさ 物置きから醤油を出し、喰べ
る。

ガチャさ おめえた、喰べえへんか?……あ
あ、そう。じやあ、ごつあんです。

石田 どうや、めしが喰べれな今のうちに、
けきの続き、新合図の練習やるか? 明日

石田 ほんとや。

全員立ち上り、一定の間隔をとり、用意
する。

全員が旗を持つ必要はないが、石田、伍
方が、わしにも、ようわからんけど。ま
あ、こたごた言つとつてもはじまらんで、
とにかくやろめえ。

ガチャさ これも、金もうけ、ごつあん。

石田 そんだけの仙値があるんじやろ、この
方が、わしにも、ようわからんけど。ま
ちゅう職員に二時間づつの増務給を付ける
いうんやで。

石田 そんだけの仙値があるんじやろ、この
方が、わしにも、ようわからんけど。ま
あ、こたごた言つとつてもはじまらんで、
とにかくやろめえ。

ガチャさ これが、金もうけ、ごつあん。

石田 ほんとや。

ヨツチン 次郎さの息子つて、(指をおり)

おめえ、……

久保 はい。……九人兄弟の六男です。

ヨツチン 九人兄弟！ ホーン。

がんさあ 壱賞金つきのくちか？

久保 エエ？

ガチャさ ハハハ……。

女郎 可愛い子じやない。

久保 なんにもわからんで、よろしゅうたの

ります。

女郎 可愛いがってやるよ。

がんさあ 女郎。てめえ又、ふとん中へ引き

ずり込むんじやねえぞ。

女郎 (鼻にしづを寄せ) フン。

石田 さあ、続きだ、久保。おめえもやれ。

久保 僕。わかりませんで、ここで見てま

す。

石田 みんなもまだわからへんのや、それ

に、どつちみち、おめも憶えんならんのや

で、一緒にやれ。

がんさあ 坊主。次郎さの息子やでって、あ

まやかしや、しねえからな。

女郎 ここへ来な。

伍長 ほれほれ、はじまつた。(久保に) こ

いつには気いつけるよ。

列車通過の音。

石田 全員 五番線。

石田 六番線。

全員 六番線。

全員 七番線。

全員 八番線。

全員 九番線。

全員 十番線。

全員 一一番線。

全員 二一番線。

全員 三一番線。

全員 四一番線。

全員 五一番線。

全員 六一番線。

全員 七一番線。

全員 八一番線。

全員 九一番線。

全員 一〇一番線。

全員 一一一番線。

全員 一二一番線。

全員 一二二番線。

全員 一二三番線。

全員 一二四番線。

全員 一二五番線。

全員 一二六番線。

全員 一二七番線。

全員 一二八番線。

全員 一二九番線。

全員 一二〇番線。

全員 一二一一番線。

全員 一二二一番線。

全員 一二三一番線。

全員 一二四一番線。

全員 一二五一番線。

全員 一二六一番線。

石田 九番線。5 4 1 (右手を上に

久保、女郎の横へ入る。

石田 ほんなら、五番からやつたな、五番線

掲げ、左右に小さく微回振る)

ヨツチン 「わかつてますよ、エエ？ そん

なもん干しとくなつて？ ……見えたつて

ええがな、わつちらの制服やも、……ヘイ

ヘイ」 (切る)

石田 (やめて) まあ、ええやろ、ああ伍長

さ、おめえの八番、ありやあエ、に見える

ぞ、ええか、8や、乙やねえ。下から最

初、はす上だもつて行く。(動作をしながら

ら注意する)

伍長 ほうかなあ。(一人で何回もくりかえ

す)

ヨツチン どうしたんや？ ヨツチン。

石田 ヨツチン、ばかばかしい、御召がもうじきく

るで、窓に干したる、きたならしいもんを

かたずけて、制服で列車の通過を見送れつ

てさ。

がんさあ 何ぬかしてけつかる、何がきたな

こいもんや、神聖なる職場で、俺たちが御

評定や。貨物収入の所で、うちの駅が案

外、大きな字で書えたるやろ。

久保 (がんさあを気にしながら) はい。

伍長 ありやあ去年のやつやが、管内で貨物

収入が九百八十六万八千二百九十五円、よ

うするに十三番目やつたと、言うことなん

や。

久保 やつぱり、村岡セメントがあるですか？

伍長 村岡だけやねえが、村岡セメントは、

この駅の一番の御得意様やろな。

がんさあ 駅長も目出でえよ、こんなもんを

ガクブチん中へ大事に入れて、まるで、て

めえ一人で実績あげた様なツラしくさつ

て。

ヨツチン 一日に、どのぐれえのセメントが

岡セメントは今、ストライキをやつとるけ

ど、ストが始まつた前日で、

ガチャさ そら、又、学士さんの講義がはじ

まつたよ。

ヨツチン こし、おるな。ええが、ストが始

まつた前日でやな、一〇五〇トン、貨車に

入番付表といつて、一年間にどこの駅が一

番、収入をあげたかっていう、当局の勤務

久保 はあ……でも、今はじめて聞きまし

して七〇車。その前日で九五六トン、八六

〇トン、一二二一トン、先月の一日平均は

一二四八トン、わかるか？

ガチャさ わかりっこ、ねえじやねえか、そ

んな数字ならべたつて。

ヨツチン 一日平均、貨車で八〇車やぞ。建

築ブームも下火になって、セメント会社が

不況や言つても、こんだけぎょうさんの車

が、毎日出るんや、二、三年前、ようする

におめえのおとつあんが、ここにおつた頃

は日に一三〇車から四〇車、多い時やと

一八〇車ぐれえ、出てつたんやぞ。一八〇

車言うとやなこの構内の郡線が全部見ええ

へんぐれえや。

宮 その頃は、貨物掛やつてカッボレ（構作

掛）やつて今の倍は、おつただな。

女郎 村岡の車が減つて、要員がけずられ、

ダイヤの改正改正で、知らんうちに元の様

に仕事はふくれて来てまつた。

がんさあ ようするに、頭數が減らされただ

け、前よりえらなつたちゅう訳じやわ。

石田 やけどヨツチン、えろうまた、くわし

ゅう調べたな。

ヨツチン たのまれたんや。地方本部の青年

部から、合理化対策の資料につけ。

こから、たたきだすぞ。

久保 はい。

伍長 そういうやあ七月の昇給、そろそろ発表

ある頃じやねえか？

ヨツチン ……草むしり、組合イコール昇給

か、フン。

伍長 ええに、ヨツチンは去年蹴られとる

で、今年は間違ひなく昇給組やで。

ヨツチン あつたりめえさ。そうでなかつた

らおら、どなり込んでつたるわい、……ね

え班長さん、こんな少ない職員の駆で昇給

する者が全体の九五%、あととの五%の中に

入つた者がなんの理由もわからず一生懸命

働いとつても蹴とばされる、そんな馬鹿な

ことつてあるかな。

石田 そらあなたヨツチン、組合やつて、その

ことについてはいつも交渉でやつとる。と

ころが当局さんは、労務管理上昇給百分比は

合なんて分裂するばつかやに。

宮 当局はな、それを狙つとるんやで、労務

管理上。

女郎 こんな川柳があつたじやない。『やレ

石田 フーン。ああ久保。星めしまんだや

る、一緒にたべよ。

久保 僕いいです。駅前でたべて来ますか

ら。

宮 ええわ、みんなの少しづつ取りやあ、

一人分ぐれえ出で。

久保 本当にいいです。

がんさあ 坊主。ゴタゴタ言つとらんと、た

べる。

久保 はい。（ハンゴウのふたに皆が少しづ

つ出し合う）

宮 なあ班長さん。村岡はいつまで睨めっこ

しとるつもりなんやろ。

石田 いつまでって、おめえ。

宮 あさつての視察日程に入つとるんやろ、

あの会社。

石田 ほんで会社もあわてとるんや、視察返

上はしたくねえ、かといって要求はのみた

くねえ。

宮 虫のいいこと、なあ、わしらもいつちょ

う、やらなあかんな、合理化や近代化やつ

て順番順番に、けずられてつてまつたら、

体がいくつあつてもたらへん。

がんさあ、こんな小さな駆で、組合が構内の

者は一組、本屋の者は二組、別れ別れにな

る打つな、ハエが手をする足をする。

石田 それを言うんなら俳句と言つてもらひ

たいね。

ヨツチン 総裁は、いつてえ、どこへ目をつ

けとるんや、新幹線じや本社の親玉が、寸

足らずのクイみてえなことやりやあがつ

て、俺たにはミミッヂイ昇給で差をつけ

る、……労務管理が聞いてあきれるよ。

伍長 うまいぞ、まあ、茶でも飲めや。

ヨツチン チエ。

宮 施んどこも率がわるいけど、村岡もそれ

以上やつてな、おら聞いてびっくりした

ぞ、こんどのストの発端やつて、昇給と新

しい機械を入れたあとの人員整理、これが

原因やろが。

伍長 人手が足らんとなると、派手な上げぞ

こ広告で人集めに躍起になるが、余つてく

るとすぐ人員整理、自宅待機、……資本家

つてなあ、勝手なもんじやのう。

ヨツチン そういうことも知らず、天皇陛下

さんはお供を連れて工場御視察か？……け

つこうなこつちやのう。

宮 「はいはい。ああ秋山さん、さきほどはどうも、……」（電話つづく）
ガチャさ やけどなあ、おら思うんやけど、会社にやつて面子つてもんがあるやろ、一
担、ひきうけといで、スト中やで御視察は返上しますなんて、言えるやうけえ、そん
なことしたら村岡セメントの信用はだら落

ちやろ、株やつてます、暴落、間違いなし
や。

伍長 相撲でいうなら、さしづめ両横綱、ガ
ッブリ四つに組みましたって格好やな。

石田 宮さ。秋山鉱山から。（宮に変る）
女郎 いつまでも四つに組んだって格好やな。
車が出てこんだけでも楽ちんだもんな、お
れたちや。

がんさま ほんで、てめえは、みそが薄いつ
て言われるんじやぞ。ええか、もし、スト
が今日、明日のうちに中止にでもなつてみ
る、村岡に溜つとるぎょうざんのセメント
はどうする……（会社やつて、てめほど馬鹿
じやねえ、一ぺんにどんと出す、ほした
ら、樂ちんだなんて喜んどれえへんぞ、ど
あほ。

女郎 ほんで、今のうちにせいぜい骨休めさ
せて、もれえてえんやがな、……それにね
え、一ぺんに出すつたって肝心のセメント
運ぶ貨車、構内にあらへんがな、仮りに今
日、ストが中止になつても、貨車が無けり
やあ仕事にならん、まあ、二三日は、大丈
夫やて。

石田 そのことやけどなあ、駅長が一、三日
前に局へ車の手配を取つたらしいんや。
（通）の事務員、チーちゃん入つてくる。
宮、電話切る。伍長、石田の側へ行き、
ボンボン話し合う。

がんさま いつ、かいでもいい匂いじやろう
が。

チーちゃん いやあね。宮さんいる？

宮 オオ？ 相手が違うんじやねえか？

ヨツチンなら、そこにおるぞ。

チーちゃん いけず、私は仕事で来たのよ、
車標頂戴。あの車、四つ、うちのでしょ。

宮 秋山鉱山へ回す車やが、まあ、チーちゃ

（スト中止のニオイを暗示する）……ま
あ、そんなことはどうでもええ、ところが
局はやな、空車を何十両も遊ばせとけん、
どたん場まで待て、そういう返事やつたら
しいんや。

伍長 ヘエ……（石田のスト中止になると
いう暗示になにかひつかりながら）ま
あ、ええがな、局がそうおつしやるんやつ
たら、おれんたが心配したるこつちやねえ
で。

伍長 秋山からはな、いつも御世話になりま
す、いって各班ヘビール三十本づつ、出た
なんやぞ。

チーちゃん うちの所長さんね、今年は不景
氣やで、どこへも御中元出さんと言つと
う。

チーちゃん うちの所長さんね、今年は不景
氣やで、どこへも御中元出さんと言つと
う。

ガチャさ いいでしょ、あんた達は村岡セメ
ントから、ガッボリ、いただいて。

チーちゃん 冗談じやないわ、村岡さんから
なんか、毎年なんにも、大きな会社のくせ
に、タオル一本ださないんやから、ケチ
ね。

チーちゃん がんさあでしよう、又あんな所
へ、エツチュウを干したの、風向きが悪い
と事務所中まで、ブンブン匂うわ。

がんさま いつ、かいでもいい匂いじやろう
が。

チーちゃん いやあね。宮さんいる？

宮 オオ？ 相手が違うんじやねえか？

ヨツチンなら、そこにおるぞ。

チーちゃん いけず、私は仕事で来たのよ、
車標頂戴。あの車、四つ、うちのでしょ。

宮 チエ。お宅だつて他所のこと言えないと
よ。

チーちゃん ……そら言えば、そらね。ハハ

……でも、これもみんな国鉄さんが運賃上
げたせいで、毎年いま頃なら、野菜や果物
の出荷で、てんてこ舞いなのに、この頃は
みんなトラックで運んじやうの、実際その
方が安いもんね。

ヨツチン 運賃値上げが御中元にまで影響す

るか、キビシイネ。

チーちゃん まあ、そういうことね、ところ
で御召はまだ。

宮 もうじきだよ。

チーちゃん 私ね、一度でいいから本物の天

皇陛下と奥さんの顔が見たいの。

ガチャさ 奥さんか、あーあ、年代のズレを

感じるね、がんさま。

宮 顔なんか見えやせんよ、アツという間に
御通過あそばされるんやで。

チーちゃん うちのばあちゃんたらね、もう
二時間も前から事務所の裏に、ゴザひいて
待つてるので。

がんさま ヘエ。このくそ暑いのに、ゴザ
ひいて二時間も、……ホーン。そもそも、あ
りがてえんかな。また、晩に走るがや、こ
こを、もつとも中は空っぽやけど。

チーちゃん そんなの意味ないわ、あー、い
けない、遊びすぎちやつた。この頃ね、所
長さんすこしうるさいの、男も五十過ぎ
るとだめね、始根性まる出し。

ガチャさ がんさま、注意しろよ。

チーちゃん がんさまは違うわねえ、じやあ
これ貰っていくわ、さつきの話、もう一度
話いてみる。（車標を持って去る）

森 助役さん、二日町の駅を通過されたそう

やで、早う汚れもんをかたずけ、迎えに出

てまわなあかんつて、駅長さんが。

石田 やいやい駅長の番犬。きたねえも

んとはなんじや、洗濯してちゃんと干した

伍長 班長殿。この日の丸の旗を持ってであ

んの為なら、エーハヤコーラ、やね。

女郎 チーちゃん、この前、話いた旅行の事
どうやつた？ もう、あてにしとるんやが
なあ。

森 （時計を見て）時間がない、じゃあ助役
さん、これ持つて、（皆の顔を見ながら）
たのみます。（森、旗を置いて逃げる様に
去る）

伍長 村の御偉方が本屋へ、ぎょうさん来
るで、早よう出でくれとよ。

森 （又、戻つて来て）宮さん。清水助役さ
んが、すぐ来てくれつて。（去る）

石田 とりあえず、出よまいか。

伍長 班長殿。この日の丸の旗を持ってであ

りますか。

石田 くだらん事を考えるよ、駅長も。

全員ナッパ服に着変える。伍長、ズボン

を探しにパンツ一枚でうろうろしてい

る。ヨッチン入ってくる。

女郎 (ふざけて) みなさん。オーテ、つない

で、この日の丸の旗を振りましようね。

宮 そうしましようね。ははは…… (去る)

がんさあ フン。幼稚園のガキじや、あるめ

えし、こんなもん。(旗を机の上に投げつける)

汽笛の音。女郎、旗を持って行こうとす

る。

石田 さあ急がな、また駅長がうるせえで。

(先に出る)

がんさあ やい女郎。てめえ、そんなもん、

持つていく気か?

女郎 いいじやない、これ振つてやれば駅長

さんが喜ぶんなら。

がんさあ よしや。ほんなら俺はこれや。

(窓に干してあるフンドシを棒の先にくく

りつける) さあ行こ。

おててえつないで、と歌う女郎を先頭に

駅長 (増え興奮してくる) もう一ぺん言つ

てみたまえ、それが駅長のわしに言える言葉かね、……けしからん。実にけしからん。……ウーン。……(うなつてているだけ

で声にならない)

清水、汗をぬきぬき電話にかかるつてい

る。平身低頭。森、駅長室での論争を聞

いている。青田は掃除をし、辻は、まも

なく到着する列車の案内をはじめる。

石田 駅長さん。そうでしょう、御召列車が

この駅へ停車するならざしらず、ここを

通過するからと書いて、日の丸の旗を振ら

せるなんて、子供じみてると思ひませんか

(駅長なのにか言おうとするが)まあまあ:

……そりやあですよ、がんさあが、その……

フンドシを持ったのは、……まあ、い

かんこつちやとしてやね。

駅長 それが、だいたい、けしからんと言う

んだ、こともあろうに天皇陛下様が御宿になつてゐる列車に対し、エッチュ、ウを持って

御出迎えするとは何事だ、不敬罪もはなは

だしい。昔であれば即刻その場で、クビだぞ。

清水、あわてて駅長室をノックする。

全員が出ていく。女郎と久保以外は旗を持っていない。汽笛の音だんだん近づき、御召列車通過して行く。

——暗転——

一二 場一 (駅本屋) 数時間後。

チヨウネクをしめた森。改札掛の辻。駅務掛の青田。忙がしそうに動いている。舞台、

中央に、今月の強調項目『乗客サービス月間七月一日～八月三十一日』と記した紙が額の中に入り、壁にかかっている。清水は村岡セ

メント専用電話で話している。

上手は駅長室になつており、チヨウネクをしめた駅長の前に女郎と久保以外の構内従事員が並んでいる。

また駅長室の壁にも貨物収入番付表が大きな額に入れられ飾つてある。

清水 「よかったですなあ、そうですか……いや、うちの方としましても、御宅があん

な騒ぎで、貨物が全然出ないもんで、営業成績がさがり、まったく弱つていたんです

よ、……これで私も助かりました。……はい、はい、かここまりました。では早速、

局の方へ連絡をとりまして……はい。出来るだけ多くの貨車を回す様、手配いたしま

すから、はい、はい。」(切る)

森 村岡はスト、中止したんですか?

清水 ああ、わしやあ、ほつとしたよ。

森 それじゃあ、あさつての御視察は、予定どうり。

石田 (がんさあに) 何とか言つたらどうだ。……エエ、いい年をして。わしはな

あ、町長や町会議員、その外大勢の前で、今日ほど恥をかいたのは初めてだ。……こ

んな無礼なことが、局の方へでも知れたら、いったいどうしてくれるんだ、君はもちろ

んのこと、最高責任者であるわしまでが責任をとられるんだぞ。……(周囲を見まわし) 君達も君達だ、描いも描つて、どう

してわしの言うことがきけないんだ。石田君。そもそも君が一番いけないんだぞ、そ

んなことで管理者としての任務が果せるのかね、わしは今まで、いくつもの駅を廻つて来たが、君の様な変り者の管理者に会つたのは始めてだ。……何がおかしいんだ。

石田 私も、ここでもう六年も運転掛をやつてますが、貴方の様な駅長に会うのは始めです。

駅長 接近のマイク。森、窓口へ行き客に切符を売る。辻、パンチを持って改札に出てる。電話鳴つているが誰も出ない。

清水 駅長さんにそのう、相談しず勝手に局どこにおる。……(怒る元氣もない) わしはもうだめだ。……わしはもう……(クニヤクニヤと椅子に腰をおとす)

清水 駅長接近のマイク。森、窓口へ行き客に切符を売る。辻、パンチを持って改札に出てる。電話鳴つているが誰も出ない。

清水 駅長さんにそのう、相談しず勝手に局どこにおる。……(怒る元氣もない) わしはもうだめだ。……わしはもう……(クニヤクニヤと椅子に腰をおとす)

清水 駅長接近のマイク。森、窓口へ行き客に切符を売る。辻、パンチを持って改札に出てる。電話鳴つているが誰も出ない。

清水 駅長さんにそのう、相談しず勝手に局どこにおる。……(怒る元氣もない) わしはもうだめだ。……わしはもう……(クニヤクニヤと椅子に腰をおとす)

清水 駅長接近のマイク。森、窓口へ行き客に切符を売る。辻、パンチを持って改札に出てる。電話鳴つているが誰も出ない。

(て) 石田君。この責任は全部、君だ。君だよ、いいか、わしはこの件に関しては一切

責任は無いんだ。君の不始末から、こうい

うことになってしまったんだ、全責任は君

が負うんだ、いいね。わしは知らんぞ。

(出でいく、飛び込んできた女郎とぶつか

り) パカ者、気をつける。(外へ飛び出し

ていく)

女郎 すんません。……チイ、どっちの言う

こっちやな。(駅長室へ入って来て) 班長

さん。村岡セメント、スト、中止したそ

です。

石田 中止した? (全員のザワメキ)

女郎 ほんで構内にある車、全部回せつて、

今、村岡から電話がありました。

石田 (清水に) 助役さん。?

清水 ……なんや? 石田さん知らなんだ

とか? さつき電話で……な。いや、その

事でわしやあ、ここへ来たんやんな。

石田 はあ?

清水 ほしたら、いきなりあの調子や、わし

なんか? さつき電話で……な。いや、その

かいだ、はは……

清水 ゆかい?

石田 (笑いをおさえ) や、駅長、勘違い

したんですよ、は……

清水 何を勘違いすることあるな?

石田 助役さんがいきなり局や、局長から電

話や、言うもんで、てつきり、フンドシの

件を局へ報告したんやと。

がんさあ わしやつてあん時は、てつきり、

そうやと、びっくりしたがな。

清水 ばかな。駅長も、どういうあわて者

や、わしがそんなことを、……ほんで、話

がチノブンカンなんじやわ、ここへ、村岡

さんから連絡、無かつたんかな。わしや

あもう、駅長、知つとるこっちやとばつか

と思って。

石田 助役さん、どうするな村岡の方。車、

山へ回す車やで、……ほうか、やつぱり中

止したか。助役さん、こりやあ、えれえこ

回してもえんかな?

石田 ありやあ回すこと出来んよ。(通) と秋

止したか。助役さん、こりやあ、えれえこ

とになるんな。

石田 マイク、列車接近を知らせる。ベル鳴つ

ている。

青田 助役さん。列車入つてくるんな。(去る)

清水 やあ。……村岡さんも、車の手配なら

してくるでなも。

女郎 それまで待てんで、構内にあるやつを

回せつて来たんや。

青田 (外で) 助役さん。

清水、舌うちして出ていく、皆も駅長室

から出る。マイク「古田川、古田川」と

告げている。おりてくる乗客の声。

石田 (外へ) 助役さん。じゃあ、駅長を探

いてくるでなも。

女郎 がんさあ、あつたりめえよ。

石田 ほかつとかつせ。

伍長 ほかつとかつせ。

石田 そつも、いかんやろう、じゃあ久保を

頼むな。(去る)

伍長 ほかつとかつせ。

石田 ほんでも、いかんやろう、じゃあ久保を

頼むな。

女郎 がんさあ、あつたりめえよ。

石田 ほんでも、いかんやろう、じゃあ久保を

頼むな。

伍長 ほんでも、いかんやろう、じゃあ久保を

頼むな。

石田 えつて。

ガチャサ 旗は旗でも、旗ちがい。

森 旗長、どこへ、すつとんで行きやあが

つた。

ヨツチン 便所の陰で泣えとるんやわ。

ガチャサ (時計を見て) ああ、四三七二が

列車接近のベル。清水入つてくる。

伍長 (ボタンをおして) 四三七二列車接

近。

ガチャサ 列車接近か、さあ女郎、行くぞ。

清水 (電話に出で) 「ああもしもし、助役

と(通) へ、もう、うれてるんですよ。エエ

? ……そう、どならんで下さいよ。」(電

話口をおさえ、外へ大声で) 助役さん。ち

よっと変ってちよう、村岡から電話。(電

話に出で) 「助役さんと変りますから、」

……えれえ大聲でどなつとるんや。

ガチャサ 列車接近か、さあ女郎、行くぞ。

森 旗長、どこへ、すつとんで行きやあが

つた。

ガチャサ 女郎、出口で集札箱を持った

が労働者は団結しなあかんや。

ガチャさ あれあれ、てめえでもまんだ、團
結なんて言葉、知つとったんか？

森
……

青田、辻、久保、集札箱をかかえてく
る。

女郎 久保。一緒に来い。（三人去る）

清水 「はい。そりあもう、さきほど御電話

いたきました時、すぐに局の方へは、：
…エエ？ 運送会社に頼む。チ・チョット

待つて下さいよ課長さん、……そ、そんな
ことされたんでは、もう一度、もう一度、
局と連絡りますから、はい、そりやあも

ちろん、御視察されるということは、は
い、ではすぐに御返事を、はい、はい、で
は。」（切る）弱ったことになったぞ、：

…駅長、駅長、いつたい、どこへ。……辻

君 青田君、森君も、みんな手分けして駅
長を探すんだ。

森 どこへ行かれたんですか？

清水 わからんから探してこいと言つてるん
だ、わかるぐらいなら……速く行くんだ。

三人飛び出て行く。宮、車標を持って入
つてくる。

やで、注意しねえとキンタマ、ふつ飛ばさ
れちまうぞ。
伍長 （外で）いいから、いいから、女郎に
やそんなシャレタ物、付いちやいねえで。

列車停る音。

清水 （電話する）「まだ空かんのか？ 空
いたら大至急だぞ。」（切る）（石田入つ
てくる）どうやつたな。

石田 官舎にやあ、奥さんしかいないんや。

清水 まったく世話をやかせる駅長だ……
外で伍長の声。「緩開い」「打合せ、突
込使用十三両持つて突込に上り、四番へ
突放、連結なし。」機関士、同じ様に復
機作だ。

宮 ほうか、村岡の正門にや、赤旗に變つて
日の丸の旗が立つて訳か、……こいつは
宮、悲しき者は官仕え（清水に）ねえ助役さ
ん、増収増収って駅長や局が言うんやつた
ら、その様に人間の方も増やいてまわな、
當局さんは減らす事は知つとっても、増や

清水 （電話する）「局の貨物課。大至急、
……などい？ 話し中、一合しか無いん
か、回線が話し中だと、じやあ、空いたら
呼んでくれ。」（切る）

宮 なんじや、みんな、あわてて。
やつて蒸発しまわあな。（仕事をはじめ
る）

伍長 駅長がどつかへ、消えちまつたんや。
宮 フーン。こんだけ暑けりやあ、人間様じ
てもええで、今すぐ回せつて言うんや。

伍長 そんな無茶な。

宮 うん。……たとえ四十両でも、三十両
でもええで、今すぐ回せつて言うんや。

伍長 成績がどうのこうの言つたって、わし
らやつて、さぼつとる訊じやなし、……ね
え、駅長の御氣嫌ばっかとつとらんと、わ
しらのことも考えてちようよ、助役さん。

宮 成績が上つて、臺ぶのは駅長だけや。
がんさあ、えれえめするのは、わっちゃんただ
けやしな。村岡のことみてえな、駅長にま
かせとかつせ。

清水 オメえらはそんなこと言つが、駅長の
ヤツアタリは、みんな、わしんどこへ来る
んやぞ。

宮 やつぱりや、けど、貨車が欲しいつた
て、あらへんがな。

清水 構内にある。

宮 冗談じやねんな、ありやあね……

清水 いやいや、そりやあ、わかつてるん
だ。

宮 だつたら、無いつて。

四三七二列車ホームに入つてくる。

伍長 さあ、こちとら歩兵共は、お仕事、お
仕事。宮さ、解放車は十三両やつたな。

宮 （外へ）伍長さ。一番戻、危険品の火薬

す事は知らつせん、いくら尻たいたつ
て馬じやなし、待てよ、そうすると俺達は
馬なみかな？

石田 ははは……

清水 工工？ 本当かね、わしやあ初耳や。

石田 ヘエ、こいつは驚いた、駅長がわし
に言わんのは、組合のことがあるでやと思
つたが、……まあ、村岡の車両課長が言つ
たんやで、間違ないとと思うがなも。

清水 ……

列車、本線に連結に入る。石田飛び出し
ていく、有線電話鳴る。

清水 （電話に出で）「はい、辻君か、なに
いない？」（窓口へ客がくる、宮窓口へ行
き、切符を売る）とにかく駅長の行きそう
などこ、全部探せ、いいな。」（電話切る）

…何もかも、尻ぬぐいはみんな、わしじ
や、（電話する）「回線はまだ空かないん
か、なにい？ いつたい、どこのどいつ
が、どこへかけとるんや、こつちは緊急な
用件があるんだぞ、その電話、切つてしま
え、……馬鹿。こつちの電話切る奴がある
が、もしもし、もしもし、」……どういう女
だ。（力一ぱい受話器をおろす）

清水 ほうやて、わしやあ合理化では、一番
の被害者や、……こんな駅を出て、他の駅
へ転勤したなつたわな。

石田 この駅へ行つたつて、おんなじや
て、こんで又、十月にはダイヤ改正やる
な、この前、ちょっと聞いたんやが、村岡
セメントの専用列車が、あらたに、ここか
で、なんでも局の方はもう承諾したとか
で、あとはダイヤに組まれるばつかやと
外で入換の音。石田が入つてくる、清水
宮 助役さん。お客様が見て笑つとるがな。

森 当局さんは減らす事は知つとっても、増や

清水 それが回さなきやあ、運送会社に頼む
つて。

清水 冗談言うなよ、そんなことされたんじ
や、局に顔向けできんよ、そんでもなくつた
つて成績がさがつていくばっかやつて、駅
長、頭へ来つぱなしやに。

石田 なも助役さん。さっきの話しあけど、

どうやね、今まんまと、本屋の連中も
可哀相やんな。例え、夏山や冬山の期間だ
けでも要員を増やせって。

清水 わしだってこの前、駅長にそう話いた

……やけど増やす人間がどこにも、余つと
らん、そり言われや、なんにも言えんが
な。

石田 駅長があかな局へ言うんやがな。

清水 冗談じやない。そんなこと、わしに出
来るかな、局へそんなこと言つたら、自分
の音があぶないがな。

石田 組合が守つてくれるがな。

清水 あかんあかん、わしらの組合いつたつ
て、あるにはあるが、おまはん等の組合と
は違うんで。

石田 こんな時に一組も二組もあらへん、そ
ん時はわしらが守るで、……今朝、駅長草
むしりしろ言つたそやなも？

清水 ……うん、しかしあれば。

石田 助役さん。わしらはなも、なにも草む
しりするのがいややで、どうこう言うんや
ねえんや。ただ、駅長の権限で、あれやれ

これやれって言つたら、わしらが動くと、
そう思い込ませたらあかんのや。

駅長、ニガイ顔で入つてくる。

電話鳴る。

清水 実は、さきほどのこと、駅長さん誤解
されてらっしゃるんですよ、いいですか、
私が局へ連絡とつたんは、例のフンドシの
件とは違うんですよ。……（強調して）村
岡セメントの、スレガ、中止になつたの
で。

駅長 じろりと石田を睨む。

清水 はい。ストが中止になつたんで、村岡
さんの方から貨車を回せとのことですので。
で。

駅長 バカ者。……ウーン、なぜ、それを早
く言わんのだ、局長から電話だなんて……
わしやあ……君という男は……だいたい落
ち着きがたりんから、こういう誤解を招く
様なことになるんだ。

清水 （汗をふきふき平身低頭）

宮 駅長さん、客がみでますよ。

駅長

……こっちへ来たまえ。（駅長室へ入
る）

入換の音、連結する金属性の音、伍長の
声「緩開い……貫通オーライ」「御苦勞
さん」汽笛鳴る。伍長入つてくる。

石田 フーン。どつちもどつちや。

伍長 通知書出来どるか！ 車掌待つと
る。

宮 今いく。

がんさあ、ガチャさ、女郎、久保入つ
くる。

がんさあ、ええか久保、連結の仕事はなあ、
駅手と違つて、ただ、ホームでつ立つて

列車監視とるとのと、訳が違つて、一つ間
違やあ、おだぶつで仮けさんよ、そのぐれ

え、あぶねえ仕事なんや。今みてえな時に
や、がんがんに貨車にしがぶりついとらん
と、やられちまうぞ。

石田 どうかしたんか？

がんさあ、……フードステップからずり落ち

て、すんでの所で片足切断や、まあ、ひざ
つ小憎、すりむいた程度やつたが。

石田 ちょっと、見せてみい。

久保 いえ、たいしたことありません、……
どうもすんませんで。

がんさあ、女郎。詰所へ行つて赤チヂムがつ
れ。

石田 はじめてやで、まだ乗せるの早え
ぞ。

ガチャさ、なあに、はじめに、こわいめ、し
やあ、これから氣いつけるて。

ヨツチン（入口で）もう待合室の日の丸の
旗おろいでもええや。

がんさあ、また、晩に御召列車の回送が通ら
つせるぞ。

ヨツチン 御召の回送？ ……からっぽの列
車にも旗がいるんけえ？

駅長 たらん？

ガチャさ ハハハ……変りにがんさあのフン

ドシでも又あげとけ。ははは……さあ、わ
しもフンドシでも洗うか、晩までにや乾く
ぞ。

石田 ヘエー、ガチャさも、ついに、それに
したんか？

ガチャさ 夏はこれにかぎる。第一涼しいか

清水 はい、三百両ほど。

らな、それに、いんきんにならんし、經濟
的じや。（笑いながら去る）

窓口（客がくる。「オーケー、東京まで一
枚」と呼ぶ）

がんさあ、森！ あの野郎どこ行きやあがつ
た。（窓口へ行つて、切符を売る）

列車接近のベル。

石田 一二六一接近。（ベルをとめる）

駅長（局へ電話している）「はい、ようや
く正常に戻りました。それで、ですね、エ
エ？ 両数ですか？ 先日お願いした両数
で結構です、はい八〇両。」

清水 駅長さん。八〇両では、たりんです
よ。

駅長 たらん？

清水 はい。

駅長 何両欲しいって、言つて來たんだね。

清水 はい、第一工場と第三工場の、今まで

トラックで運んでいた分を、遠方へ間にあ
わせる為、全部、貨車で運ぶからつて。

駅長 だから、どのくらいの貨車がいると、
いってきたんだ。

がんさあ、ええか久保、連結の仕事はなあ、
駅手と違つて、ただ、ホームでつ立つて

列車監視とるとのと、訳が違つて、一つ間
違やあ、おだぶつで仮けさんよ、そのぐれ

え、あぶねえ仕事なんや。今みてえな時に
や、がんがんに貨車にしがぶりついとらん
と、やられちまうぞ。

がんさあ、……フードステップからずり落ち

なにしる、両陸下が工場を視察されるとな
つて、エエ？ 会社側が折れたのかつて？
さあ、その辺のことは、……もちろん私も
御同行させていただくんですが、いや、一
時はどうなることかと、ははは……いやい
や、工場長も一度、課長さんと御一緒に……

「しく、はい。」（切る）……ウーム、三百
両、か。

駅長の電話の最中に森、青田、帰つてくる。青田事務をとり、森窓口で切符を売りながら、石田と話している。宮、通知書、車標を持って出る。

石田（はがきを持つて）こりやあ、おそら
く登山客の投書やろ。

森そらあね、弁解する訳やないけど、こん
だけ昼も夜もれんちやんで、登山、登山つ
てあんなに大勢の客に来られたんじやあ、
わしらやつて、そこまで手が回らんのや
で、……それやに、こんなもんを、まつた
く馬鹿にしとる。

石田こりやあ、やっぱ駅長に見した方が
ええぞ。

森とんでもない。こんなもん見せれるか
な、この前やつて辻さんが正直に見せたば
つかに、わしら、一時間もしばられたんや
んな。

伍長てめえら、たわけじやわ、しほられる
でつて隠いといたら、こういうのが、いつ
くらでも来るぞ、こんだけの人員はどう
しても大勢の客が満足いく様には、出来ん

のやつて、はつきり言わん。

ヨツチン駅長やつてなも、ほんこと百も
んにも言わんでええことさいわい、知らん

顔の半兵衛で、ほおつかむりさ。言つてや
んなよ。（壁にかかる「強調項目」
を指して）あんない御題目を並べるんや
つたら、その様に材料をそろえてくれつ
て。

汽笛の音。ヨツチン、フライ旗を持って
飛び出していく。

石田しかしなあ、このはがきに書いたるこ
とも一理あるぞ。

（何か言おうとする）……

石田いや、おめえのことやと言うんやねえ
よ、よう新聞の投書欄に乗つとるやろ。

森やけど、はつきり日付けと、出札掛のつ
て書いたるんやで。

がんさあ、裸の写真でも、見とつたんじや
る。

森（ムーとして）バカなこと言うなよ、い
いか先週の土曜日は、朝から登山客がごつ
たがえして、三千人近くの乗降者があつた

森やぞ、飯やつて、俺んだ交替でたばたぐ
んやぞ、飯やつて、俺んだ交替でたばたぐ

れや、一人一人に、ニコニコしれつたつ
て、そんな隙も余裕もあるかい。

下り列車、通過していく。

石田なあ森、乗客や荷主にサービスがいき
とどかねえのは、おめえや駅員の責任やね
え、スキーパスや登山客が一日に何千人来よ
うと、シーズンオフの百人足らずの時とお

んなじ様に、切符売りは一人、切符切りは
一人、これじやあ、客のおこるのも無理ね
え。そう思わんか？ こつちは汗たらたら
流いてやつとつても、お客はそんなこと知
らへん、外の奴等はさぼつとる、とこうく
る、言うなりやあ合理化の敷寄せが、大切
なお客さん迷惑をかけとるんや。……さ
つきも清水助役さんに話いたんやが、今朝
の草取りの一件やつてそうや、だまつて當
局の言わせることをハイコラ、ハイコラ
聞いてやつたら、どんな無理な仕事でも押し
つけてくる、これが合理化の本質やぞ。

森、青田、だまつて聞いている。ヨツチ
ン入つて来て電話する。

ヨツチン「一二六一、マルで通過」

森、青田、だまつて聞いている。ヨツチ
ン入つて来て電話する。

青田（机の引き出しから、十通ほどのはが
き、手紙を出して）こんだけ、……たまつ
とるんや。

伍長要員さえ増えりやあ、（はがきを持つ
て）こんな投書なんかも、来ん様になる
ぞ。

森……

青田（机の引き出しから、十通ほどのはが
き、手紙を出して）こんだけ、……たまつ
とるんや。

伍長へエー、これ全部、投書か？

青田……まあ。

伍長俺にさせ。（青田しぶる）ええで、よ
こせ。（青田、森の顔を見て、しぶしぶ渡
す）どうや、やるか。

森……

青田清水助役さんが、やるつていわつせや
あ、俺等やつて……なあ森。

伍長よし、ほんならやるな。

森……清水助役さんも、（強く念をおす）
助役さんも一緒にやつたらやで。

石田入つて来て電話する。窓口で客の
声。「小荷物たのむ」

石田（四三七二、マルで発車）（切る）

ヨツチン（電話口で）「どうも、御心配かけました。」（切る）駅長、町長などへ行つたんやと、「おめえらあんまり、駅長をいじめるな」やと、へん、何んにもこちやあ、いじめとらへんに、のう。

宮と辻話しながら入つてくる。村岡セメント専用電話鳴る。

宮（電話に出で）「はいはい、貨物掛の宮ですが、駅長ですか？　はい、すぐ呼びます。」（駅長室をノックする）駅長さん、村岡さんから電話です。

駅長出でくる、皆がたむろしているのでジロリと睨む。森あわてて窓口の方を向いて仕事をはじめる。がんさあ、石田の後に身を隠す。

駅長 辻君。接近のベルが鳴つてゐるじゃないか、速く列車監視に出たまえ。（辻、フライ旗を持ってとび出していく）君達も雑談するなんなら奥でしたまえ、外からまる見えじゃないか……（電話に出る）「ああ、どうも駅長です。いやいや、さきほどは留守にしておりまして、はあ、今そちらへお電話しようど、はい、ただ今、局と話しがつ

きまして、三百両でしたな。」

ヨツチン？　三百両。？……

駅長「時間ですか？　一番速いので九八六に三〇両つけて来ますから、十六時三十分までには一回目の車がそちらへ……それから、三二六三の後すぐ臨貨を組むと言つてましたので、十八時二十分頃、到着の予定です、はあ？　遅い。いや、しかし、こ

れでも精一ぱいの時間で、なにしろ本線のダイヤは倒存じの通りサイの日の様な状態で、今日は又、御召が通りました関係上、

ダイヤもいくぶん乱れてますので、そこへ割り込むだけでも、容易なことじや、なかつたんです。おまけに、またすぐあとに御召列車の回送が組まれてますし。はあ？……なぜもつと早く車を用意しなかつたのかつて、おっしゃるんですか？……いや私も、そのことで局へは、二三日前からくどいほど言つたんだですが、……ええ、まあ局としましても、それだけの空車を遊ばせとくのは、と、……それにうちの構内といいましても、百五十両入れますと車を動かし様もない状態ですので、……いや、まったく申し訳ございません、エエ？……構内の？……それが……あの貨車は……いえい

え、けつして、お宅の方を後回しだなんて、そんな、……はあ、宮君。秋山鉱山と（通）、後にしてはまずいかね。宮あそこだつてもう、あてにしてるんですけどからねえ、それにもう、秋山さんは通知書、作つてた様でしたから。

駅長、そこをなんとか……なあ宮君。後に定する方法は。

宮と、いいますと？

駅長……うん、そのう……

列車通過していく。

石田　駅長さん。村岡さんの方、もう少し待つてもらつたらどうです、十六時半までに入るものでしたら、もう二時間そこそこじやないですか。

駅長　四日間も停つていて、ほうぼうの御乗車は、と、……それにうちの構内といひ、意先から、やいやい言われてるそうなんや、……なあ、半分でもどうかな。

駅長　馬鹿なこと言うんじやないよ。（電話に出て）「もしもし、エエ？　いやあ、そりやあ困りますよ、運送会社に頼むなんて、……（思いきって）わかりました。では構

つて、予約までしてある会社の車を。

駅長　石田君。君も私と同じ様に赤い帽子をかぶつてゐる人間だよ。……だつたら物の道理ぐらいわかつてもいいだらう。

石田　（言おうとするが）
（清水、おり場がないので駅長室へ入つて山鉱山へは、わしが事情を話し、貨車が着いたら、すぐ回す。（駅長室へ去る）
いやな間。

駅長　（おいかぶせて）駅長命令だ。……秋山鉱山へは、わしが事情を話し、貨車が着いたら、すぐ回す。（駅長室へ去る）
チーちゃん、宮さん。もう二両追加してもらえない。

ヤ。蛙、蛙が。

宮　ははは……こんなもん、しょつちゅうやげ、恐いのか？　ははは……こんな蛙が恐くては百姓家に嫁に行けんぞ、ヨツチンなんか、ヘンビを裸にして、バーベキューだぞ。

チーちゃん、宮さん、ほ、ほつてよ。（シードーとぼつて）

宮　さあさあ、お嬢様が恐いとおっしゃるから（手で蛙をつかみ）かあちゃんの所へ帰りなさい。（表へ持つていく）だいぶ、残業手当を稼いだな。

チーちゃんたわけらしいわ、私達、残業手当なんて、いつ錢も附かないんよ。

宮　へエー、いくら残業してもか？
チーちゃん、事務員はね、食事が出るだけ。
それも五〇円のラーメンが、だからやるだ

石田　しかし秋山だつて（通）だつて、国鉄にとつては、大切な御得意様じやないです。

駅長　そんなこと、わかつちよる。だが、今、村岡さんを怒らせてしまつたら、どうなると思う。

清水。（さきほどから石田をつづいていた音が、小声で）石田君。
石田　いくら村岡が大切な御得意だからと言ふ

一三　場一（駅本屋）数時間後。
——暗転——

け損なの。

宮 フーン。何處こも、情勢は厳しいね。

チ一ちゃん これも、みんなお宅の駅長さん
のせいよ、車、みんな持つてちやうもん
で。さつきもね、農協が来て、名古屋の青

物市場へ発送するはずの、スイカやらウリ
を、明日の市に間に合わないで、トラック
で運ぶでって、品物をみんな持つてつちや

つたの。所長さん、ブリブリ怒つてたわ、
私だって半日かかって作った伝票や車標の
書き直でしょ、頭へきらやうわ。

宮 よし、ほんなら俺が、チ一ちゃんの残業
手当を駅長から取つてやるか。

チ一ちゃん もちよ。(笑)

石田 入つてくる。列車接近のベル鳴る。

石田 宮さ。これから村岡へ車だしに行くん
じやが、乗つてかないか。(ベルとめる)

宮 出る車はわかつてるから、いいよ。
チ一ちゃん そうそう。こんな原因を作つた
村岡の、スト中止のことね。(声をおとし
て)あれ、中止じやなくて、延期しただけ
だつてよ。

石田 延期?

チ一ちゃん さつきね、うちのナカセの人があ

村岡から帰つてきて、言つてたわ。これ
は、ここだけの話しだけどね、県から知事
さんがきて、知事の顔をたててほしいつ
て、じきじきに組合を説得したんだって、
新聞にみんなにデカデカと日程を出しちゃ
つたでしょう、だから今さら視察の日程を
変更するのは県の恥になるって、だから、
とりあえず、戦いは一時休戦つてことにし
て、外へは中止になりましたって、言つて
るんだそうよ。

石田 組合も、それで納得したんかな?
チ一ちゃん うん。知事さんの要求を受け
るか、受けないかで、組合の中、はちの
奥、つづいた様な騒ぎだったそうよ。

宮 ヘエ。

チ一ちゃん それで結局、意見が二つに割
れ、委員長の橋本さん、泣きながら知事の
要求をのんだんだって、でも、絶対、中止

にはしないつて言つてるそうよ。

石田 しかし、ストの延期なんて聞いたこと
ねえからな。

宮 会社側が県の方へ手、回したんさ、休戦
状態に持つてつて、その間に分割工作。::
::よくある手や。

チ一ちゃん それでね、会社がこんなこと言
ねえからな。

石田 おそらく、今裂して、ある程度、要求
は通つたにしろ、中止だらうな。

電話鳴る。辻である。

辻 「はい本屋。」……助役さん、構内か
ら。(フライ旗を持って外へ出る)

石田 (電話にて)「はい。ああ、そうか、

清水 第一その、ひまわり新聞なんて、聞い
たことも、見たことも無いぢやないかね。

男 ホワーダつたらなおさらのこと、助役
さんにも一部、購読していただきたいです

なあ、いや、うちの新聞はですね、一般的の
商業新聞と違つて、ものごとの核心をつい
ているんですよ、何事にもね、事実、その

ものばかりとね。

清水 フン。そこらによくある、ゴロ……

駅長 (おいかぶせて) 清水君。

男 なんて、おっしゃつたんですか? ゴロ:

…ゴロつき新聞とおっしゃりたいんですけどか?

に置く)おい。よう冷えとるぞ。どうにか
忙しいのも、峠を越した様やな。

森 (大きなためいき) 越したと思つたら、
またすぐ夜の部の開幕じやわ。

青田 二一八列車、倉石であふれた乗客が、
かなり居たと言うで、また戦争やぞ。

森 (くそでもねえ) こうなりやあ、矢でも鉄
砲でも、どんと来いってんだ。

青田 待合室からコープラス、また始まる。

列車通過していく。宮考えこむ。

森 エエ? 五千円いたしましたので、四

千七百六十五円じゃないですか?

客の声 四千六百六十五円しかないよ。

森 エエ? (札をかぞえて) どうも、申し訳
ありません。

青田 入つてくる。

客の声 ほけてちやあ、いかんよ。

森 すいません。

青田 (電話する) 「一〇四、マルで通過」

(宮、車標を持って出していく)

青田 (湯のみを二つ持つて辻の机と森の机
つていただいているんですよ。

つてるんだけ、会社側としては、視察を
受けたいから延期したんじやない、延期し
たからつて、組合の要求をのんだんじやな
い、あくまでも県や知事の顔を、たてるた
めに、こうしたまでだつて。……どおお、

なにもかも、人を喰つた様な話でしょ。
そのくせ、一番もうけたのは言つてゐる会社
自身なんだから。

宮 クソー。ど狸め。

チ一ちゃん 四日間も続けてきて、どたんば
で休戦だなんて、どうも、おかしいと思う
わ、……なきれない組合。どうせ今までや
つたんだから、要求が通るまで、やればい
いのに、赤旗がずらりと並んでる所を視察
してもらやあ、いつくら会社が強気だから
つて、ねえ。……でも、もう、だめね、手
うつたら、いくら橋本さんが中止じやない
つて言つたつて。

石田 おそらく、今裂して、ある程度、要求
は通つたにしろ、中止だらうな。

清水 第一その、ひまわり新聞なんて、聞い
たことも、見たことも無いぢやないかね。

男 ホワーダつたらなおさらのこと、助役
さんにも一部、購読していただきたいです

なあ、いや、うちの新聞はですね、一般的の
商業新聞と違つて、ものごとの核心をつい
ているんですよ、何事にもね、事実、その

ものばかりとね。

清水 フン。そこらによくある、ゴロ……

駅長 (おいかぶせて) 清水君。

男 なんて、おっしゃつたんですか? ゴロ:

…ゴロつき新聞とおっしゃりたいんですけどか?

清水 第一その、ひまわり新聞なんて、聞い
たことも、見たことも無いぢやないかね。

男 ホワーダつたらなおさらのこと、助役
さんにも一部、購読していただきたいです

なあ、いや、うちの新聞はですね、一般的の
商業新聞と違つて、ものごとの核心をつい
ているんですよ、何事にもね、事実、その

ものばかりとね。

清水 フン。そこらによくある、ゴロ……

駅長 (おいかぶせて) 清水君。

男 なんて、おっしゃつたんですか? ゴロ:

…ゴロつき新聞とおっしゃりたいんですけどか?

清水 第一その、ひまわり新聞なんて、聞い
たことも、見たことも無いぢやないかね。

男 ホワーダつたらなおさらのこと、助役
さんにも一部、購読していただきたいです

なあ、いや、うちの新聞はですね、一般的の
商業新聞と違つて、ものごとの核心をつい
ているんですよ、何事にもね、事実、その

ものばかりとね。

本屋の電話鳴る。青田かかる。

駅長　いや、どうも失礼なことを申しまして。

男　なるほどねえ、……こういう管理者が居る様な所じやあ、ろくでもない職員の一人や二人居るもの、無理ないですな。

駅長　エエ?.....

青田　(駅長室へ顔を出し) 助役さん。秋山さんから電話です。

清水出ていく。

男　なんでも、今日の昼。御召列車が通過した際、その列車に、フンドシを振った職員が、いたそうですね。

駅長　(急にあわてて) や。……いや、そんなな。

男　こりやあ、面白い記事になりそうだな、……いつちよう、書いてみるか。

清水(電話口で) 「秋山さんには、本当に御迷惑をおかけしております、はい。さきほど着きました。今、構内に仕訳しておりますので、終り次第すぐ回しますから、そりやあ、もちろんです、はい。はい、かしこまりました。それでは後ほど、駅長と一緒に伺ひさせていただきますから、……

はい。」(切る)

男　冗談なことされちゃ困りますなあ、(机の上から千円札を取つて) いいですか

(机の上から千円札を取つて) いいですか駅長さん。私はね、ゆすり、たかりに来たんじやainいんですよ。

駅長　いやいや、私も決して、そんなふうに思つとりませんが、これは(千円札を渡す)

男　私はね、これでも、ジャーナリストのつもりですよ、変なふうに誤解されちゃ困りますなあ。

駅長　誤解だなんて、とんでもない。

男　ねえ、駅長さん、まあ記事のことは、別として、どうでしょうね、うちの新聞を購読して、いただけませんか。……年間、たったの六千円なんですがねえ。

駅長　…………

男　しかし、なんですか、こんなことがお

おやけになりますと、現場長たる、駅長さんの立場というか、責任というか……

清水、さきほどから構内詰所へ電話しているが通じない。伍長、がんさあ、女郎が入ってくる。

駅長　(静かに) どうしたというんだね、君達は、もう

駅長室から、駅長、男出てくる。

清水　ああ伍長さ。また秋山さんから請求の

電話があつたんや、どうや、まんだ、車もつて行けんかね。

伍長　持つて行けんかってなも、よう考えてちよう助役さん。村岡からはこんな、せまい構内へどんどん貨車は出でくる。本線へは、バカスカと列車が到着する、おまけに七分や八分たらずの時間で、入換作業はしんならん。

がんさあ　今までに来た二百両からの車、半分ぐれえ構内にほかたるんじやんな。

清水　いやまあ、今日の所は、がまんして。伍長　がまんして、やつとるで。どうにか、ここまですんできたんや、これ以上、もっと速くやれ言われるんやつたら、事故が起きてても、わしら、よう責任もたんな。

がんさあ　今までに来た二百両からの車、半分ぐれえ構内にほかたるんじやんな。

清水　おどかすなよ。

伍長　助役さんをおどけえても、しようがねえがな。

女郎　わつちんたの、身にもなつてちようだいよ、晩めしにもありつけず、水ばつか飲んで、(腹をつつき) これ、タツブン、タツブン、いつとるがな。

駅長　(静かに) どうしたといふのか。

男　じゃあ駅長さん。わたしはこれで。

駅長　君。かならず約束は守つてくれたまえ。

男　わかつてますよ。じやあ。(去る)

駅長　クソ。……何をやつてるんだ。

清水　はい、あの、秋山さんから、又、請求の電話がありまして。

駅長　なにい? まだ、回してないんか?

辻　(さううきゅう) 助役さん、三六九接近。

駅長　秋山鉱山の引き込み線へ一時、預けたらいいだろ。

ガチヤさ　駅長さん。ところで三六九で解放する車、三十二両あるんやが、どこへ入れるんやな?

ヨツチン　構内の郡線、村岡から出た車や、入れる車で、ポンポンですよ。

三六九列車入つてくる。清水あわてて出していく。

駅長　秋山鉱山へ回す車は、

がんさあ　ほんなら、秋山鉱山へ回す車は、

どうするんやな?

駅長　……いつたい、石田君は、なにやつところんだ。

女郎　助役さんは、村岡へ貨車、出しに行つてますよ。

マイクの声。「ただ今より、上り十九時五十九分発、東京行きの改札を行います」清水入つてくる。

駅長　待合室騒がしくなり、辻パンチを持って出でいく。

がんさあ　村岡から出た車の整理やつて、や

辻　駅長さん。二一八、登山客で満員や、言つてきたんですが、どうします? 正規の

女郎　たのむんな、本屋の連中も、やる言つとるや。

清水　わかつとる。

伍長　助役さん。わしら今、向うで相談した

んやが、明日にでも団体交渉やるんな。こんだけ尻からぼいまくられたら、かなわんで、今日の、このど忙がしいのが、いいチヤンスや。

女郎　たのむんな、本屋の連中も、やる言つとるや。

伍長　ほれみんせえ、この通り次から次へと仕事が入つてくるに。

清水　なあ、たのむよ。秋山さんにも迷惑かけるんやで。(頭をさげて) この通りや。な、わしやつて、あつち、こつちから、つつかれ……

がんさあ　いつてえ、こんなど忙がしい時に、駅長は、なにやつちよるんじやな。

清水　駅長は、そのう……

伍長　だいたい駅長は、一にも二にも村岡、村岡つて、村岡セメントの養子みてえに頭、さげっぱなしやで、あかんのや。

女郎　そうそう、いらん時にばつか、構内巡視しとらんと、こんな時にこそ、構内へ出て来て、陣頭指揮するのが現場長たる駅長の任務やがな。

辻　助役さん三六九が入つてくるんな。

清水　わかつとる。

伍長　駅長さん。

駅長　……な、なんだ、君達は、……

伍長　わしら、体ひとつしかあらへんのやしんだけ尻からぼいまくられたら、かなわんで、今日の、このど忙がしいのが、いいチヤンスや。

女郎　たのむんな、本屋の連中も、やる言つとるや。

通り出札口から出しますか？

駅長 そんなこと、毎日やつとてわからんのか。

清水 五百人近い客がおりるんですよ。

駅長 何人こようと同じだ。

清水 それでの、三六九の……

ガチャさ あそこへは、(通)の車が入つてます。

駅長 留置線はどうしたんだ。

駅長 (通)の? 構内には、一本も空いた

線は無いんか？

伍長 村岡から出でくる車を入れる線、五番

と六番線が空いとるだけです。

外で機関士、機笛を鳴らし「どうしたん

じやい。入換はやるなんか、やらんのか」

上り列車、二一八列車、接近ベル鳴る。

駅長 (通)の? 構内には、一本も空いた

線は無いんか？

駅長 九〇〇一? 御召列車の回送じゃな

いか?

駅長 ……ウーム……まったく局も、どうか

して、こんな混んでる時間帯に、それも

御召の回送が走るつてえことわかつていな

がら、なにも車を寄こさんでもいいのに:

○〇一は、何分に入るんだ。

村岡さんへ電話して、こっちへ、来るの

をストップさせる。(伍長に)とりあえ

ず、その空いてる線へ解放するんだ、九

〇〇一は、何分に入るんだ。

はい、本日は時刻変更しておりまし

て、五十二分ですから。

駅長 (時計を見て)あと、四分で接近が入

るじゃないか。

清水 はい。

駅長 いかん。いかん。いかん。(伍長に)

早くするんだ、早く三六九の入換をするん

だ、早くしないと早くしないと九〇〇一に

当つちまうぞ。

伍長 当るも当らんも、二分や三分では、と

うてい逃げれませんよ、たかが空っぽの御

召の回送ぐらい。

駅長 たかが? たかがとはなんだ、たとえ

空車でも、天皇陛下様が御乗りになつた、

駅長 全員、笑いながら出でいく。外で伍長

「悪いけど、急いでちょうど、御召の回

送がケツぼつとる。では打合せ、下り

本線から現車三十二両持つて、突っ込へ

上り、五番線へ、十五両、六番線へ十七

両、持ち込み。一番線で二十五両連結。」

(機関士同じ様に復唱する)「オーラ

イ」

駅長、制服、制帽姿でとび出してくる。

駅長 ガチャさ 日の丸の旗は、持たんでええんか

がんさあ はあ?……

駅長 ガンサア。お前のために、わしやあ六

千円も、ふんだくられたんだぞ。

駅長 もういい、早くいけ。(駅長室に入つ

く村岡さんへ電話しないか。

清水 はい、ただいま。(電話にかかる)

女郎 こんな恰好でええかしら?

ヨツチン どうあるいな。

駅長 ガンサア はあ?……

駅長 ガンサア。お前のために、わしやあ六

千円も、ふんだくられたんだぞ。

駅長 もういい、早くいけ。(駅長室に入つ

く村岡さんへ電話しないか。

清水 はい、ただいま。(電話にかかる)

女郎 こんな恰好でええかしら?

ヨツチン どうあるいな。

駅長 ガンサア はあ?……

駅長 ガンサア。お前のために、わしやあ六

千円も、ふんだくられたんだぞ。

駅長 もういい、早くいけ。(駅長室に入つ

く村岡さんへ電話しないか。

駅長 ガンサア。お前のために、わしやあ六

千円も、ふんだくられたんだぞ。

登山客 オリでくる。人の騒ぐ声。

駅長 (外へ出て)早くしろ、九〇〇一がケ

ツについてるんだぞ。

外で「わかってますよ。」列車、動き出

す。

清水 (電話している)「私、駅の清水です

が、うちの石田運転掛、まだ、そちらにお

りますでしようか?」

青田 助役さん。上りが入つてきますよ。

清水 (電話口で)「チョット待つて下さい

よ。」

マイクの声「まもなく東京行きの列車が

入りますから御注意ください。列車の出

入口は混雑しますので、順序よく御乗車

ください。」

清水 駅長さん。すみませんが、上りの列車

を見ていただけませんか。

駅長 君は、なにをやつてるんだ。

清水 はい、村岡さんへ。

駅長 まだ、連絡がつかないんか?

清水 外でベルが鳴る。駅長、あわてて出でい

く。列車入ってくる。

駅長 マイクの声。「古田川、古田川でござい

ます。この列車は当駅で十一分停車いた

ん本線にさがつて残留車を拾い、郡線へ一

個列車、待避せろ、そして九〇〇一を三

六九の前に走らせるんだ。

清水 エエ? 三六九の前に。そんなことし

て、局の方は。

駅長 九〇〇一が遅れてもいいって言うの

訳には……そうですか、いや、どうも。」

(切る)えらいこつちや。駅長さん、駅長

さん。(入り口で駅長と会う)えらいこと

ですか、向うを出でました。そうです。

駅長 出た。

清水 はい。

駅長 九〇〇一列車接近のベル鳴る。青田放送

します」

清水 (電話口で)エエ? 「なんですか?

もしもし、エエ? 今そちらを出た。……

出てしまつたんですか、あの貨車を停める

訳には……そうですか、いや、どうも。」

(切る)えらいこつちや。駅長さん、駅長

さん。(入り口で駅長と会う)えらいこと

ですか、向うを出でました。そうです。

駅長 わかっている。

清水 はい。(飛び出していく)

駅長 (電話を取つて)局を呼んでくれ。

駅長 いく。

駅長 九〇〇一列車接近。 (外へとび出して

いる)

駅長 九〇〇一が停つた。……(涙声に

なり)御乗用列車が停つてしまつた。……

えらいこつちや、えらいこつちや。(電話

そのままにして外へ飛び出す)速くしてく

れ。九〇〇一が機外で停つてゐんだぞ。天

皇陛下様の御車が、御車が停つてゐんだ

ぞ。こんなことしたら、ただでは済まんの

だ、速くしてくれ。

久保 駅長さん。これれます。

駅長 (入つてきて) 久保。
久保 は?

駅長 いま、村岡セメントから貨車が出てく

るで、この発煙筒を焚いて汽車、停めてこ
い。

駅長 久保はまだ、発煙筒の使い方、知らんの
でしよう?

駅長 こんなものは、誰れにだつて出来るん
だ。いいか久保。(発煙筒を持って) ここ
を、こうして。

宮 まだ、構内もはつきりわからん者に、無
茶ですよ。もし障害事故でも起つたらどう
するな。わしが行きますよ。(発煙筒を持
つて去る)

駅長 森……森……ええい。どいつも、
こいつも。久保、改札の方、手伝つたれ。
久保 はい。(外へ去る)

駅長 (電話に出で) 「もしもしし……もしもし
ああ、わたくし、古田川の駅長です。実は
九〇〇一が、……そうです、その列車が機
外停車しちやつたんです。入換が遅れまし
て、申し訳ありません。それで、三六九を
とりあえず、ここへ待避させまして、九〇
〇一を先に走らせますから。(汽笛の音数

回、下り本線に列車さがつてくる) くわし
いことは又、のちほど。」(切つて外へ出
る) たのむ。たのむから速くやつてくれ、
通過時刻が一分二十秒、遅れてるんだ。
(連結する金属性の音)

森 入つてくる。

森 なんですか?

駅長 二日町の駅へ電話するんだ。三六九は
ここで取り込んだから、九〇〇一を先にや
るって。(列車引き上げていく)

森 お客さんが。

駅長 いいから電話しろ。(放送室へ入る)

森 ……(大きな溜息をついて、電話にかか
る)

駅長 外で客の騒ぐ声。

客の声 バカヤロー、駅員はなにやつてん
だ。

駅長 (マイクから) 皆さん。皆さんには大
変御迷惑をおかけしておりますが、改札口
が混雑しておりますので、押し合はないで
順序よく出てください。

森 クソ。こんなもん。(強調項目を破る)
マイクから駅長、何回も繰り返してい
る。電話鳴るが森、出ようとしない。裏

客の声 バカヤロー、駅員はこれだけしか居
ないなんか、運賃ばかり上げやがつて、サ
ビスが悪いぞ。

駅長 (マイクから) 告さん。私は駅長で
す、どうか、あわてないで、ゆつくりと出
てください、怪我人が出るといけませんの
で押し合わないで、ゆつくりと。

客の声 駅長を出せ、駅長を!

辻の声 駅長さん。助けてくださいよ。

森 駅長、森。乗客を静かにさせるんだ、臨時列
車が通過するから、ホームの客を早く整理
するんだ。

駅長 森。乗客を静かにさせるんだ、臨時列
車が通過するから、ホームの客を早く整理
するんだ。

森 電話を切り、壁にかかっている強調項
目をくいいる様に睨んでいる。

駅長 (マイクから) 皆さん、どうか静かに
ねがいます。下り本線を臨時列車が通過い
たしますので、危険ですから白線の内側ま
でさがつて下さい。改札口が混雑しており
ます、どうか御協力ください。

森 クソ。こんなもん。(強調項目を破る)
マイクから駅長、何回も繰り返してい
る。電話鳴るが森、出ようとしない。裏

森 電話を切り、壁にかかっている強調項
目をくいいる様に睨んでいる。

駅長 (マイクから) 皆さん、どうか静かに
ねがいます。下り本線を臨時列車が通過い
たしますので、危険ですから白線の内側ま
でさがつて下さい。改札口が混雑しており
ます、どうか御協力ください。

森 クソ。こんなもん。(強調項目を破る)
マイクから駅長、何回も繰り返してい
る。電話鳴るが森、出ようとしない。裏

森 電話を切り、壁にかかっている強調項
目をくいいる様に睨んでいる。

清水 口から清水、フラフラになつて入つてく
る。森、外へ去る。

—— 静かに幕 ——

島君と私たちの劇団

こばやし ひろし

清水 (電話をうらめしそうにじつと睨みつ
けている) ……(ゆっくりとり、ゆっくり
した口調で) ……「モシモシ、助役の清水
です……右田さんかな、……貨車が入らん
? わしやあ知らんがな、駅長に言つてちょ
う。……あんたの好きな様に、どうなとし
てちよう。わしやあもう知らん。」(電
話を切り、椅子にどつかと尻をおろしてし
まう。汽笛を鳴らし列車が入つてくる。駅
長放送室から、あわてて制服、制帽をとと
のえながら出てくる)

駅長 (椅子に座つている清水をみつけ) 清
水君。列車だ。御乗用列車の通過だ。(外
へとび出していく)

清水 (座つたまま) ……九〇〇一……ハ
ハ、ハハハ……(恰好だけの敬礼を
して) ……空の御名、通過。ハ、ハ、ハハ
……。わしやつて、わしやつて、あした
は、だんたいこうしょや。ハハハ……因
体交渉や。ハハハ……(泣いているのか
笑つているのかわからない)

九〇〇一列車、汽笛を鳴らし、騒音をた
くわしいことは又、のちほど。」(切つて外へ出
る) たのむ。たのむから速くやつてくれ、
通つて去る)

私たちの劇団が創作劇を運動の主軸にすえ
てもう十年になる。どうして創作劇を大切に
しだしたか、難しいことはいわないので、
のがなかつたからだ。これは作品がいい悪い
の問題以前の身近かに感じないと、いうことか
らくる。ということは劇団にとつても観客に
とつてもそういうなのである。

「何かわれわれでやれるいい脚本はあります
せんか」とよく演劇サークルなんかで聞かれ
る。私は何とも答えない。いい作品はあつ
ても、それは与えられた受身の作品だからで
ある。私たちの現実から遠い作品もあれば私
たちの現実認識からざれた所にある作品もあ
る。すでにそこで私たちの創造主体は崩れて
ゆく。観客も鑑賞という教養主義的な枠の中
に、友人倫理の中で見てくれるということ
になる。まして地方劇団は役者や舞台美術の

力の限界から、多くの制約を受ける。私たち
はここからの解放を求めたのだといつてい
い。

かといって観客に責任がある以上、創作劇
も簡単には生れない。五年たつても、六年た
つても結局、書き手は私だけだった。私だけ
ではせいぜい年一本生みだせばまずは成功
で、これもいつ限界が現れるかわからない。
こうして第二・第三の書き手を核に創造を強
化することが劇団の長期的な展望の上にたつ
ての切なる願いとなつた。

十周年公演「どん底」「郡上の立百姓」の
公演成功は劇団に組織としても自信をもたし
めた。ここに創造強化のための長期的な三つ
の運動目標が設定されたのである。

(1) 劇作劇団の組織化。

(2) 総合舞台はぐるま(舞台美術部門)の

設立。

(3) 稽古場兼小劇場の設立。

(2)は若尾綜合舞台の援助で、劇作集団と共にいち早くできた。(3)は今年、苦難を重ねて三十人を収容しうる稽古場兼小劇場を完成した。この三つの目標は共に有機的な関係にあるのである。小劇場は長期公演と発表の場を多くすることによって演出・役者の創造を高め、同時に新しい作家の発表の場にすることができる。総合舞台は舞台美術部門は地方劇団の恵部で、この強化は逆に演出・役者の創造を拡大させるのみか、作者にもはねかえてくる。私も最初は一杯舞台ばかり書いて来たが、舞台美術部が一定の力をえるようになつてからは自由にかくようになつた。こうした努力の中心に劇作集団があつたといつても

いい。

劇作集団は創立二年になる。今では名古屋が労演を中心に岐阜・愛知・三重に拡つていて、これも他の部門と同様、中身はこれからである。岐阜だけで十四名の同人がいる。劇団員は五名参加しているがその一人が島君なのである。

「九〇〇一列車接近」はこうした意識的な劇団の努力の最初の結晶といえよう。少くとも、劇団の組織に守られて生れて来た第二の書き手であることには間違いない。私もそうであるが、こうした一体感こそ既成脚本ない強味なのである。彼はいうまでもなく国鉄の労働者だ。毎日貨車の入れかえをやってゐる。彼はよくいう「国鉄いってねえ、新幹線の車掌ばかり見てまつては困るわい。」たび

上 演 料 の こ と

げんざい東・西リ演その他の団体では、上演料についての独自の規定をもつておらずません。そのため便宜上、日本演劇協会の規定に準じてきました。これは、同協会に加盟している劇作家の作品を上演する場合の最低基準ですが、われわれも当面これに拠つていいと

おもいます。

無料公演一回	一幕劇	六〇〇円
	多幕劇	一一〇〇円
有料公演一回	一幕劇	二〇〇〇円
	多幕劇	四〇〇〇円

これが一昨年改訂された現行の額で、その後の変更はありません。ただし、東リ演ではこれに付加して、寸劇、朗読詩、シユプレヒ

コール等の小品については、一幕劇の半額と

いう申合わせをしています。
作家を守り、創作活動を発展させる観点から、上演許可を得ることと上演料を支払うことの二つは必ず実行してください。

作者への連絡等については、東・西リ演事務局または「演劇会議」発行所へお問合せください。

たびヶガをするが、一步間違えば命を失う。そこで労働し、その空氣をすつてバイタリティが彼の中にある。構成力や展開の弱さは、それで十分補われている。とくに一場の労働者の生活感は今までの作品にはない迫力を感じる。劇団の文演部で討議、前後四回攻撃させられているが、殆んどが構成上の問題だけ、この生々した人物には文句のつけようがなかった。

この他に二つ彼には作品があるが、これがもっともすぐれていると思う。今、彼は出発点にいるのだ。いろんな批判を一杯あびせてやつて頂きたい。その中で東リ演の作家に育つて行くと私は思う。

- 演劇制作スタッフ派遣 ● 舞台用器材貸出・販売
- 舞台照明操作・プラン作製・一式引受

組合や会社の文化祭・サークルの発表会のとき
どんなご相談でも気軽に申越しください。

特にサークルのしごとは、サークルの身になっていろいろな経験を生かし、経費の点もご便宜をはかります。………ぜひどうぞ。

第一ステージサービス

東京都渋谷区代々木2-12・西原ビル TEL. 03-370-0487(代表)

演劇会議 第九号

定価 一五〇円(送料三五円)

編集委員

萩坂桃彦・山村金平・黒沢参吉

仲 武司・森本景文・藤沢 薫

発行所

川崎市上平間二二七五

電話川崎(52)八一五

印刷所

横浜市南区前里町二ノ四四

■ あ と が き ■

風が秋めいてきました。各劇団とも秋のシーズンにむけてご活躍のことでしょう。

活版化にふみきった第八号、おかげさま好評。品切れで、せつかくの申込みを第九号からにふりかえていただく始末、今号から若干増刷しました。

この蔭には、全劇団員が労組や地域、学園をめぐつて二五部もの固定読者をつくってくれた、南大阪劇研のような積極的な活動があることを報告しております。

島君の作品に續いて、すでに数本の戯曲作品が編集委員会に届いています。戯曲にかぎらず活動レポート、劇評その他の原稿をどしどし送ってください。本誌の理想は、読者みなさんの機関誌になることです。いつそうのあとおしゃれを願いします。